



[事務局からのお知らせ]

彙報

第一回理事会(5月28日開催)での決定事項を受け、6月6日付で通信による臨時評議員会が開催されました。審議・報告事項は以下の通りです。

- ・今鷹 真会員の顧問推薦について
投票の結果、今鷹真会員を顧問に推薦することを決定。後日会員ご本人の受諾を得て、正式に就任が決定しました。尚、就任はさかのぼって平成16年4月1日付となります。
- ・日本中国学会賞受賞者の決定についての報告
[哲学・思想部門] 該当者なし
[文学・語学部門] 田中智行『「金瓶梅」の感情観——感情を動かすものへの認識とその表現——』(『日本中国学会報』第57集掲載)
- ・新入会員の承認
第一回理事会で決定した新入会員(通常会員20名、賛助会員1社)の入会が承認されました。

また、10月7日の評議員会における報告及び決定事項は次の通り。

[報告事項]

- (1) 平成19・20年度役員選挙(評議員・理事長)の結果について

- (2) 平成19・20年度副理事長・理事の委嘱について
- (3) 監事選挙の結果について
- (4) 顧問・特別会員・物故会員について
- (5) 平成19年度『日本中国学会報』編集担当校、学界展望担当校、大会開催校について

[議決事項]

- (1) 平成17年度決算報告について
- (2) 平成18年度予算案について
- (3) 会員動向の確認及び新入会員の承認について
会員動向と第二回理事会(同10月7日開催)で決定した新入会員(通常会員20名)の入会が承認されました。
- (4) ホームページ特別委員会の設置について

翌10月8日の総会において、評議員会の議決事項が報告されました。

◎会費の納入について

会費未納の方は、至急ご送金願います。2ヶ年(平成17・18年度)未納の方には、本年度の『学会報』を送付いたしておりません。また、4年間滞納されると、除名になりますので、ご注意ください。

郵便為替口座：00160-9-89927

◎退会の通知、住所変更について

退会ならびに住所・所属機関等の変更の際には、速やかに事務局へご通知ください。通知は書面かファックス、もしくは振替用紙の通信欄にてお願いします。

中国における日本中国学の翻訳 ——現代文学の場合（補遺）

理事長 丸尾 常喜

先号で「中国における日本中国学の翻訳——現代文学の場合」と題して、日本人研究者の研究書の翻訳状況を整理してみた。私の研究分野である現代文学の場合についてまとめ、できれば“抛磚引玉”の役割をはたしてくれればとねがったものであるが、目録は急に思い立って作成したため、やはり漏れたものがあり、ここで四月以降に刊行されたものも含めて、補遺を加えておきたいと思う。

私がこの欄に執筆するのは今回が最後であり、来年3月までまだ重要な会務がのこっているが、ここでひとこと会員の皆さんにお礼を申し上げることをお許しいただきたいと思う。

第58回大会は10月8、9日に、完成したばかりの大東文化大学板橋キャンパスで開かれた。林克教授を代表者とする準備委員会では周到な準備を重ねられ、多数の院生の活躍ぶりが目立つ活気のある運営を行われ、成功裡に幕を閉じることができた。「中国学への提言—外から見た日本の中国学研究」と題するオムニバス講演会は、わが国における人文学をめぐる深刻な問題、中でも中国学が遭遇している内外の困難をどのように認識し、どう打開していくか、存立の基盤そのものが問われている状況の中で、私たちがどこにその存立の意義を見出し、研究者としての責任をはたしていくかを考えるうえで、きわめて時宜にかなったものであった。

講演者はそれぞれよく論旨を練り上げられてのぞまれた。最終プログラムであったが、160名の会員が参加して熱心に聴講した。講演の要旨は本号にも収められているが、全文を冊子にまとめ全会員にお届けできるよう、理事会で予備費からの支出を決定したので、参加されなかった会員もぜひお読みいただき、今後の議論に活かしていただきたいと思う。

私自身は現役退職後の身で思いもかけず大任を与えられ、非力を恥じることがしばしばであったが、

ひとまず今日をむかえることができたのは、役員をはじめ『学会報』の刊行、大会の開催などの会務を着実に果たされた会員のお力によるものである。中でも、大上正美氏には新会則の施行以来三期にわたって副理事長の任にあたり、御尽力をいただいた。心からお礼を申し上げる。

さて、近年『学会報』の学界展望が担当校および執筆者の御努力と出版委員会のゆきとどいた協力によって、たいへん充実したものとなってきたことは、すでに以前にもふれたことがある。ただ目録自体は日本で出版された刊行物に掲載されたものを著録することになっているため、中国における翻訳書の刊行状況はつかめない。今年刊行の第58集の「学界展望（語学）」（佐藤昭氏執筆）には、音韻分野の特筆すべき収穫として『平山久雄語学論文集』（商務印書館）が紹介されている。これは日本で刊行された単行本を翻訳したのではなく、直接中国で刊行された中国語による著作である。今後このような刊行形態も少しずつふえていくのではないかと思うのであるが、ともかく哲学・思想、古典文学の分野でもすでに少なくない単行本が翻訳されている。どなたか分野別に紹介の労をとっていただければありがたいと思う。以下本題の図書10点を挙げる。

① 楽黛雲編『国外魯迅研究論集（1960-1981）』北京大学出版社、1981

これは日本人研究者の論文のみを収めたものではないため、前回割愛したものである。文革後海外の研究を重視しはじめた中国の動向を先駆的に示したもので、高田淳、竹内実、伊藤虎丸、丸山昇、木山英雄の5氏の論文を含む19編が収録されている。

② 内山嘉吉、奈良和夫著、韓宗滄訳、周燕麗校『魯迅与木刻』人民美術出版社、1985

③伊藤漱平、中島利郎編、楊国華訳、朱雯校『魯迅・増田渉弟答問集』華東師範大学出版社、1989

④伊藤虎丸監修、小谷一郎、劉平編『田漢在日本』人民文学出版社、1997

③は増田渉氏が魯迅の『中国小説史略』（増田渉訳『支那小説史』、サイレン社、1935）や佐藤春夫・増田渉訳『魯迅選集』（岩波文庫、1935）の翻訳中に魯迅との間に交わした書信（問答）を集めた同名の書（汲古書院刊、1986）の中国語訳。④は劇作家田漢の留日時代に関する文章と同氏と交流のあった佐藤春夫、谷崎潤一郎等の関連文章を集めた資料編に加えて劉平・小谷一郎「田漢留学日本大事記」、小谷一郎「田漢与同時代日本作家交流大事記」、「田漢与日本—以在日時的田漢及其与日本作家的交流为中心—」を収める。伊藤虎丸氏の序文からは文革後同氏が積極的にすすめられた日中間の研究交流の経緯を知ることができる。

⑤釜屋修著、梅娘訳『玉米地里的作家—趙樹理評伝』北岳文芸出版社、2000

⑥鍾敬文著／訳、王得后編『尋找魯迅・魯迅印象』北京出版社、2002

⑦樽本照雄編、賀偉訳『新編増補清末民初小説目録』齊魯書社、2002

⑧丸尾常喜著、秦弓訳『“人”与“鬼”的糾葛』（増訂本）人民文学出版社、2006

⑨樽本照雄著、陳薇監訳『清末小説研究集稿』齊魯書社、2006

⑩渡辺晴夫著『日中微型小説比較研究論集』（東京）DTP出版、2006

⑤は『中国の栄光と悲惨—評伝趙樹理』（玉川大学出版部、1979）の翻訳。訳者梅娘は日本にも留学し、日中戦争期に淪陥区となった北京で活躍した女性作家、新中国では北京市大衆文芸創作研究会で趙樹理とともにたらいっていたことがある人である。

⑥は後半に前回の④に掲げた増田渉著、鍾敬文訳『魯迅的印象』を収めている。⑦は清末小説研究に属するため前は割愛したが、今回⑨とともに掲げる。ちなみに樽本氏の主宰する清末小説研究会の機関誌『清末小説研究』は現在29号まで出されているが、中国人研究者の中国語論文も多く掲載され、さながら日中研究者の研究交流の場になっている。⑧は前

掲げた⑨を増訂改版して“毛頭鷹學術文叢”の1冊としたもの。⑩は著者が中国の雑誌に中国語で発表した論文を収める。日本で出版されたが、中国その他の研究者向けの発信である。今後このような出版形態もふえることが考えられる。

昨年、北京魯迅博物館編『韓国魯迅研究論文集』（河南文芸出版社）が刊行された。今日では周知のとおり中国の諸大学での外国人留学生の中で韓国人の数は日本人をしのぐほどになり、中国文学の研究者も増加し、中国の研究誌上で韓国人学者の論文を見ることも多くなった。そこで中国現代文学研究における日・韓両国の交流についても若干ふれておくことにしたい。

韓国で中国現代文学研究が解禁になったのは1980年であった。1980年代に韓国の研究界に大きな影響を与えたのが、丸山昇氏の研究で、『魯迅—その文学と革命』（平凡社東洋文庫、1965）が1982年、『魯迅と革命文学』（紀伊国屋新書、1965）が1986年に韓国語訳された。韓国における中国現代文学研究の過渡的状況を反映したものであろうが、解禁された魯迅の作品の系統的な翻訳・紹介は、最初竹内好訳『魯迅文集』全6巻（筑摩書房、1977-78）の韓訳本によってなされた（1985-87）。竹内好『魯迅』（日本評論社初版、1944）はややおくれて2003年に韓訳本が刊行されている。

中国現代文学研究における日・韓交流は1990年代に入ってしだいに深まり、1999年12月に東京大学で行われたシンポジウム「東アジアにおける魯迅の受容」には、中国、香港、台湾からの参加者とともに韓国からソウル大学金時俊教授（当時韓国中国現代文学学会会長）、韓国外国語大学朴宰雨教授（同学会第2代会長）はじめ9名の韓国人研究者が参加している。今年7月に東京大学で「東京・ソウル中国現代文学研究対話会」（東大中文研究室・東京現代中国文学研究会・韓国中国現代文学学会共催）が開かれ、韓国側発言者7名（コメンテーター8名）、日本側発言者7名（コメンテーター7名）が報告を行った。報告者が、多く若手研究者で、そのテーマも多様であったことに、日・韓の研究交流の進展の状況がよく示されている。

「東アジアの經典解釋における言語分析」 第一回國際學術シンポジウム参加報告

近藤 浩之（北海道大学）

北海道大学と台湾大学は、2005年3月に大学間交流協定を締結し、学生の交換留学等が実現し、学術の交流と協力が積極的に進められている。

その交流協力活動の中でも重要な活動の一つとして、「東アジアの經典解釋における言語分析」第一回國際學術シンポジウム（首屆東亞經典詮釋中的語文分析國際學術研討會 Inaugural International Symposium on Interpretations of Classics in Philological Analysis in East Asia）が、2006年8月23日～25日に、北海道大学文学研究科と台湾大学人文社会高等研究院および国科会經典詮釋中的語文分析研究計画の共催で、北海道大学百年記念会館大会議室において開催された。

開会式では、共催する双方の代表者、佐藤鍊太郎教授（北海道大学文学研究科）・鄭吉雄教授（台湾大学中国文学系）の挨拶、北海道大学・台湾大学両学の副学長の祝辞の披露が行なわれ、さらに、体調不良のため已むなく参加されなかった伊東倫厚教授（北海道大学文学研究科）からの祝辞も伝えられた。今回のシンポジウムは、經典・解釈・文献学の三者間の密接な関係に着目し、東アジア地域における、儒家と仏教、言語と哲理、文献と思想、解釈と言語分析などの間の、異なった研究方法や理論を融合して、經典の文化的価値及び東アジアの精神的伝統をより深く広く探究し継承していくことが目指されている。

また、今回のシンポジウムは「文献と解釈研究フォーラム（2006～2010年）」の第一回に当たるので、開会式では、フォーラムの構成と計画について簡単な紹介もなされた。本フォーラムは、国境の枠を超えた学術共同組織であり、主にアジアと北米の学界の研究者150人余りによって構成される。2006年から2010年まで、台湾大学の鄭吉雄・甘懷真、東

京大学の平勢隆郎、関西大学の吾妻重二、北海道大学の佐藤鍊太郎、ペンシルバニア州立大学の伍安祖、シンガポール大学の勞悦強、北京大学の顧歆藝・顧永新の九名の構成員によって、順番に学術シンポジウムが開催される。来年以降は台湾大学で第二回、北京大学で第三回、シンガポール大学で第四回が予定されている（詳しくは、文獻與詮釋研究論壇のホームページ：<http://eastasia.csie.org/fsctt/zh/>を参照）。

さて、本会議の内容については、あらかじめポスターで「発表者および発表題目」は公表されており、各発表内容についても、日中両国語で予稿集が用意されて関係者に事前に配布され、その予稿集に収められなかった原稿は発表当日に受付で配布された。発表は基本的に中国語で行なわれ、適宜、通訳もなされた。実際の発表順に従って紹介すれば、発表者および発表題目は次の通りである（なお、ポスターの「発表題目」と若干異なるものもあるが、ここに示すのが実際に発表された題目である）。

鄭吉雄（台湾大学中国文学系）「論易道主剛」、楊秀芳（台湾大学中国文学系）「從詞族觀點看「天行健」的意義」、近藤浩之（北海道大学文学研究科）「「神明」的思想——以『易』傳爲中心」、沈婉霖（清華大学博士研究生）「從甲骨、金文辭例重看《易經》〈屯〉卦之意象」、三浦秀一（東北大学文学研究科）「十六世紀中國における陽明學と老莊思想の出会い：朱得之《莊子通義》を手掛かりに」、林啓屏（政治大学中国文学系）「儒家思想中的知行觀——以孟子、象山、陽明爲例」、佐藤鍊太郎（北海道大学文学研究科）「「心外無法」の系譜——禪學、心學、陽明學、そして武道」、松江崇（北海道大学文学研究科）「略談《六度集經》語言的口語性——以疑問代詞系統爲例」、羅因（台湾大学中国文学系）「漢譯說一切有部中兩種佛傳中對於佛陀的不同詮釋」、殘和順（北海

道大学文学研究科)「『論語鄭氏注』の思想的特色」、水上雅晴(北海道大学文学研究科)「明經博士家の『論語』解釋——清原宣賢の場合——」、魏培泉(中央研究院語言學研究所)「《關尹子》非先秦作品之語言證據」、佐藤將之(台湾大学哲学系)「『變化』的象徵化與秩序化：〈易傳〉的聖人與《荀子》的君王」、徐富昌(台湾大学中国文学系)「論簡帛典籍中的異文問題」、劉文清(台湾大学中国文学系)「惠棟《九經古義》之解經觀念——「經之義存乎訓」探微」、名畑嘉則(藤女子大学文学部)「二程子の“經”學——朱熹の批判を通して見る程・朱の立場の相違——」、王家泠(台湾大学博士研究生)「魏晉南北朝「神明」觀念的變遷」、松本武晃(北海道大学博士課程)「日本における『春秋胡傳』の受容」、田村將(北海道大学博士課程)「劉逢祿の經世思想に對する再檢討——「通三統」説を中心として——」、以上、三日間にわたって台湾側から10、日本側から9、合計19の発表が行なわれた。

會議全体を通して、仏教經典・儒家教典などの經典解釈に関する言語学・文字学・訓詁学、および解釈と思想の各方面からの新たな方法や視点が報告されて、それぞれの専門分野の研究者が相互に刺激を受け合い、活発に質疑し意見を交換していた。このような広い分野にまたがるシンポジウムの場合、往々にして個別的でつながりのない報告の羅列のようになってしまうものだが、このシンポジウムでは、発表の組合せや順序がよく工夫され、さらに會議後の和やかなレセプションなどを通して、異なる専門分野の研究者同士が対話する機会が多く、本当の意味で学際的交流とその深化がなされたという印象を受けた。例えば、思想の分野を専門とする私個人にとって言うならば、松江崇氏と魏培泉氏による言語学の分野からの発表は、疑問代詞の用法や「即」「是」「所以」「可V+O」「不V之」などの語法の丹念な分析から、かなり明瞭な傾向と結論が導き出せることを示しており、思想的分析だけでは得られない確かな証拠やデータの抽出の方法について、学ぶべき所が多かった。おそらく同様に、各分野の研究者がその他の分野の研究者から多くの啓発を受けたはずである。引き続き、今後の「文献と解釈研究フォー

ラム(2006~2010年)」の活動と展開が大いに期待される。

本シンポジウムの成果は、各発表内容の推敲を経て、来年には台湾と日本で、それぞれ中国語と日本語の論文集として出版・公開される予定である。

本シンポジウムについての問合せ先：

北海道大学大学院文学研究科中国文化論講座

〒060-0810 北海道札幌市北区北10条西7丁目

電話・FAX：011-706-3018/3051



第13回唐代文学会に参加して

土谷 彰男（早稲田大学）

去る8月21日より26日まで、第13回中国唐代文学会国際大会（中国唐代文学学会第十三届年会暨唐代文学国際学術研討会）が、中国唐代文学会、首都師範大学文学院、および首都師範大学中国詩歌研究センターの共催のもと、北京市海淀区・中工大厦、および怀柔区寛溝・北京市政府招待所において行われた。大会期間中、参加者は120名余り、論文は90篇以上を数え、われわれ日本からの参加者のほか、香港、台湾の代表も数多く顔を揃え、活発な意見交換がなされた。

大会初日の開幕式では、首都師範大学校長の許祥源氏が中国詩歌研究センターについて紹介され、また中国唐代文学会会長の傅璇琮氏は、前回2004年の華南師範大学（広州市）の大会以降における学会の展望について所感を述べられた。ついで、社会科学院文学研究所所長の楊義氏、台湾大学中文系主任の何寄澎氏、岡山大学文学部の下定雅弘氏が、それぞれ発言された。何氏は、台湾における唐代文学研究の動きを大陸との関わりから紹介され、また下定氏は、近年白居易研究における日中間の接近について述べられた。

ところで、主催のひとつである首都師範大学中国詩歌研究センターは、教育部より人文社会科学の重点教育基地として批准を受け、これまでも『中国詩歌研究』（中華書局）をはじめ、『文学前沿』（学苑出版社）などを刊行するといったように、古典詩歌研究の領域にとどまらず近現代文学を含む鑑賞や創作といった幅広い方面において活動を行っている。余談ではあるが、筆者はかつて留学中にこの研究センターの有志が主催する『古詩源』読詩会なる活動に参加したことがあるのだが、中国各地から集まった若い学生が故郷の口音によって古詩を高らかに歌い、また意見を出し合って熱心に討論する様子に感銘を受けたものである。

さて、開幕式につづき、大会の基調をなす大会発言が行われた。この席では、羅宗強氏（南開大）、葛曉音氏（北京大）、陳尚君氏（復旦大）、陶文鵬氏（社会科学院文学遺産編集部）、李浩氏（西北大）、

吳相洲氏（首都師範大）が、各自の研究領域に基づいた発言をされた。葛曉音氏は、近年北京大と香港浸会大（Hong Kong Baptist University）との間を定期的に往復されていることから、香港における古典文学研究の方法と最近の動向について詳細に報告された。陳尚君氏は、最近出版された『全唐文補編』『旧五代史校注』の編纂過程における所感と晩唐詩人研究の展開などについて述べられた。また李浩氏は、唐代園林研究の現状と私家園林研究の意義について、吳相洲氏は樂府詩と音楽の関りについて、それぞれ最新の知見を披瀝された。

グループセッションは30名ほどが一組となり、大会期間中にそれぞれ計4場が設けられた。日本からの参加者は、戸倉英美氏（東大）、下定雅弘氏、佐藤浩一氏（早大非常勤）、渡部れい子君（早大院）、紺野達也君（同）、それに筆者であった。筆者は、下定氏、渡部君とともに第四組に分配されたことから、ここではその様子を中心として紹介していきたい。

第四組は、葛景春氏（河南省社会科学院）、羅時進氏（蘇州大）、呂正恵氏（台湾淡江大）、および下定氏の進行のもと発言と討論が繰り広げられた。発言者は総勢25名。内容から大別すれば、李杜、白居易に関連する報告が半数を占める。いまその報告を発表順に挙げると、渡部れい子「論李白詩歌中の“逸”」、董就雄（香港城市大）「仇注杜詩〈秋興八首〉四区分截說析論」、廖美玉（台湾成功大）「李白記憶身世的兩種譜系」、湯華泉（安徽大）「七言歌行的体式与李白歌行的特徵」、葛景春「李杜律詩之變及其原因」、盧燕平（紹興文理学院）「試論李白的武功意向及其嘗試」、李子龍（安徽馬鞍山市李白研究所）「李白“採石捉月”考論」、下定雅弘「從白居易的詠“裘”詩看其“共生思想”」、呂正恵「白居易的“中隱”觀及其矛盾」、吳相洲「杜詩“沈鬱頓挫”風格含義弁析」、張蜀恵（台湾東華大）「從白居易蘇軾“歷杭”作品看其南方意識的形成」、雷喬英（首都師範大院）「江州貶官与白居易詩歌思想二元結合的轉換」など、計13編。

各論の詳細については、今度の『唐代文学研究』などにおいてそれぞれ発表がなされるであろうからそれに譲るとして、ここでは議論の様子をごく簡単に紹介したい。

李白については、その身分と生平の問題のほか、席上では葛景春氏の報告にみられるように、詩人の個性と詩型との関わりについて、活発な意見のやり取りが見られた。また、白居易については、その後半生の作品に着目した報告が少なくなかった。下定氏は、白居易の「裘」を詠む作に込められた共生思想によって、白居易における独善の意味をあらためて提示した。これに対して、査屏球氏（復旦大）は、杜甫の詠「裘」詩にも白居易と同様の傾向が見出せること、呉相洲氏は、白居易の共生思想が彼の自己満足と密接に関わることを意見として加えた。さきにも述べたように下定氏は、開幕式にて白居易研究における日中間の接近について、とくに後半生の作品研究の重要性について述べておられたが、今回の議論の様子を見てみると、中国の研究者もこの辺りに十分注意を払っていることが理解された。

報告はこのほか、筆者「関于皎然《詩式》与大曆貞元文学的劃分」、孫学堂（山東大）「孟浩然“冲淡中有壮逸之气”別解」、査屏球（復旦大）「“趙倚楼”“一笛風”与禅宗語言」、張明非（广西師大）「論李商隱詩的象徵藝術」、張学松（広東省海洋大）「晚唐詩人在農民起義中的心態表現及命運」、羅時進「晚唐詠史詩的修辭策略」、蔡阿聰（復旦大）「論岑參入仕時期貶謫作品及其家世之關係」など。晚唐詩歌の研究は、さきにも触れた陳尚君氏の発言に見られるように、近年資料が整備されつつあるなか、今後質量とも長足の進歩を遂げるものと思われる。

グループセッションをひととおり終えたのち、最後の大会発言では、各々のグループ代表による総括が行われた。第一組・陳鉄民氏（社会科学院）、第二組・劉明華氏（西南大）、第三組・杜曉勤氏（北京大）、第四組・羅時進氏の発言に続き、周勳初氏（南京大）が今大会の総括と学会についての所感を述べられた。つづく閉幕式では、董乃斌氏（上海大）、閻琦氏（西北大）、傅璇琮氏などが発言され、この席にて次回2008年の開催校として、なおも未定としながらその候補に、蘇州大学、安徽師範大学の名が挙がっていることが知らされた。

四日間に亘る大会期間中、研究発表のほか出席者相互の親睦を図るべくいくつかの催しが企画された。そのうち、北京市内の老舍茶館での観劇と北京郊外の金山嶺長城の参観は忘れがたいものとなった。



大会主催者が参加者に対するホスピタリティを表すものとして、彼地では「考察」などと称してこのような催しを設けることは通例である。参加者にしてみれば、遠路はるばる足を運ぶもうひとつの目的ともなり、よって学術討論という本来の目的に「観光」の色が滲むことになる。一方で、このような学会の運営に対して批判の声が上がっているとも伝え聞く。大陸には古典文学の領域に限っても、日本の比にならぬほど数多くの学会が存在し、それこそ月に一度は何かしらの学会が開かれていてもおかしくはない。地方の人民政府の肝いりとなれば、えてして観光的側面が強く出てしまうのもいたしかたないことであろう。だが、筆者は今回、このような催しが決して不要となるものではないことに気づかされた。というのも、このような機会を借りてこそ、参加者が相互に人事の消息や学会開催の情報交換を行ったり、そのみならず、依頼や招聘状の受け渡しといったやり取りを行うのにちょうどよいものだからである。情報の疎通が便宜のやり取りと重なるところに、いかにも大陸的なものを感じさせるのであるが、情報交易の場としてこのような催しの存在意義は、今後も変わらないであろう。

今回、主催者のホスピタリティはまことに周到であった。大会期間中に会場を灼熱の北京市内から郊外の湖畔の避暑地に移したのも、そのひとつである。ただ、ここで特筆すべきは、これまで外国人参加者に課せられてきた高額な参加費が今回は撤廃され、彼此分かつみならず一律になったことである。参加費は主催者の裁量によって決められているものと思われる、今回このように至った経緯は明らかではないが、これまでの不均衡が除かれたことは喜ばしくもあり、また近年成長著しい中国の片鱗をうかがわせる思いでもあった。いずれにしても、学会開催の苦労は並大抵ではないはずである。大会を成功裏に進めた首都師範大学の関係者に対し、ここに謝意を記しておきたい。（文中一部敬称略）

人文学における個人研究と共同研究

片岡 龍 (東北大学)

1、中国学と日本思想史学の異同、科学の専門分化

かつて中山茂氏は、学問の種類として、古代バビロニアや中国の天文学型の「記録的学問」と、ソフィストや諸子百家流の「論争的学問」という二つの類型を立てた。前者は、地味で視野は狭く保守的な傾向があるが、着実に知識を蓄積していく。しかし新しい問題を生む力が弱く、知識を積み重ねていっても、いっこう天人の相関法則が見出せないため、次第に飽きられ、後継者を引きつける魅力を失っていく。後者は、問題提起そのものが主な機能で、つねに新しい問題を生み出すが、たいていは論争しっぱなしで結論にいたらず、論争相手がいなくなり関心が薄らぐと、記録されず跡形がなくなり、学問的伝統を形成しない(『歴史としての学問』中公叢書、1974)。前者は中国学の、後者は日本思想史学の、それぞれある側面を言い当てている。両学とも、現在等しく「人文学全体の危機」の流れの中にいるが、いたづらに古きよき時代を懐かしむのでなく、それぞれの学問的個性に即して、自らの過去を対象化し、行く末を見定め、この事態に処すことが必要である。特に世界に冠たる日本中国学の遺産は、人文学全体において突出した特色をもつものであって、その保全と活用は、斯学界の重要課題と思われる。『東洋学の系譜』、同第二集(大修館書店、1992、1994)、『東方学回想』I~IX(刀水書房、2000)、『岩波講座：「帝国」日本の学知 第3巻 東洋学の磁場』(岩波書店、2006)等続く更に多様な試みが、当学会を発信源として、展開していくことを望む。

一方、人文科学の危機は、大きく科学全体の危機の中で捉える必要もある。科学が体制として確立した19世紀以来、科学は専門主義をとり、それは必然的にさらなる専門分化を生み出してきた。この科学の縮小再生産・細分化のプロセスは、藤垣裕子『専

門知と公共性』(東京大学出版会、2003)に詳しい。自然科学の場合、専門分化とそれに伴う弊害は、現に医療ミスや環境問題における責任の所在などの問題として顕在化し、喫緊の対応を迫られている。人文学でも、たとえば宗教学において、専門的な制度領域が広がるにつれ、それと同時に近代科学にのっとった訓練を受けた専門家では対処しきれない領域も露わになり、そうした領域に従来の宗教概念では捉えられない、たとえばオウム真理教のような宗教現象が現れてくるという指摘もある(島蘭進「死生学試論(一)」『死生学研究』2003年春号、同『現代宗教の可能性』岩波書店、1997)。藤垣氏は、現代科学者の専門主義の源泉を「レフェリー制度によって保たれているジャーナル共同体の知識の審判機構」に認めているが、この機構自体の制度疲弊を疑わせるかのような実験結果も、同書には紹介されている(24頁)。

2、共同研究の必要性和難しさ

このような専門化の進展に伴う問題に対応する可能性の一つに、共同研究という方法がある。「人文学における共同研究」というテーマで、ただちに思い浮かべるのは、1968年に行なわれた桑原武夫氏の最終講義である。その講義録(中村真一郎・坪内祐三編『最終講義』実業之日本社、1997所収)や、斎藤清明『京大人文研』(創隆社、1986)などを見ると、共同研究の楽しさや、それを引っ張っていった桑原氏や今西錦司氏等の人柄の魅力が強く印象付けられる。共同研究を成功させるために、こうした雰囲気作りやリーダーシップが必要なことは、多田道太郎氏も強調している(「共同研究の手法と取組み」明治学院大学立法研究会『共同研究の知恵』信山社、1994)。しかし、鶴見俊輔氏が言うように、京大人

文研西洋部の成功は、参加者が「第二次世界大戦での日本の敗北についての共通の記憶、その共通の価値意識」をもつ世代であったことが、より大きな要因と思われる（『共同研究の方法』『鶴見俊輔集4 転向研究』筑摩書房、1991）。この共通の価値意識を、現代の我々はおもてない、事は科学の細分化だけでなく、かくもバラバラになった世界において、果たして共同研究に必要な共通の問題意識をもち、それを練り上げていくことは可能かという問題がある。この問題はすでに、大学紛争時代に、京大人文研の助手会の企画委員会宛ての公開質問状においても指摘されている（『人文科学研究所50年』京都大学人文科学研究所、1979。前掲『京大人文研』）。今や、そうした一種の共通の価値意識をもった全共闘世代すら定年を迎えつつあり、加えて社会全体の個人主義化傾向と相俟って、共同研究を行なう基盤は崩壊に瀕している。また、今年の新年号の『日本歴史』（692号、吉川弘文館）では、「共同研究の成果とゆくえ」と題した特集が組まれていて、これを見ると、現在、史学において、どれほど研究テーマが細分化しており、そのためある大きなテーマを扱うためには、共同研究を進めざるを得ず、しかしさらにその共同研究自体の数が無数にあって、それらの成果を共有し、全体像を獲得することがいかに困難な状況にあるかが分かる。

3、学問の歴史の共同研究

『洪江抽斎』の中で鴎外は、抽斎の考証学は決してディレッタンティズムではない、道に至るための手段である。それがために一人の生涯、あるいは数世代の時間を費やすかもしれない。しかしほかに手段がなければ、学者はここに従事しなければならないと述べている。同書の中で、めずらしく鴎外が饒舌に語っている箇所である。

日本の近世後期の学問は、近世なりに行き詰まっていた。しかし、例えば考証学という「下学」が、全体に到達しないのではないか、「上達」しないのではないかという漠たる不安よりも、それを上回る道への信念、それにもとづいた「下学」の努力、これが近代と比較したときの、近世の学問の特色であ

る。中世の宗教的世界から、近世の世俗的世界への転換が起こり、「宗教」は「学問」という形をとるようになった。一般に、日本の学問のタコツボ化は、欧米の学問を輸入した19C後半が、ちょうど近代学問の専門化・分業が始まったときだったからと言われるが（丸山眞男『日本の思想』岩波新書、1961）、タコツボ化は、すでに近世から始まっているようにも見える。しかし、それはまた、近代のタコツボとは異なる。

このような学問の性格、またそれがどのようにして始まり、どのような経路を辿って、次第に行き詰まり、そして当時の学者はそれにどう処そうとしたのかといった学問の歴史を探る事は、私にとっては興味深いテーマである。しかし、言うまでもなく一人ではどうも太刀打ちできない課題なので、これを、まさに「共同研究」のテーマとして掲げたい。共同研究といっても、何も実際に集まって行なう必要もないので、同じ目的意識を共有してさえいれば、それぞれ自由に進めればよい。要は、共通の問題意識さえあれば、個別研究がそのまま「共同研究」になるというのが、私の結論である。

共同研究の歴史を「共同研究」というのも、半分冗談みたいだが面白い課題である。いわゆる「総力戦体制論」の中での人文科学・自然科学における共同研究の位置づけに関しては、山根幸夫『東洋文化事業の歴史』（汲古選書、2005）、沢井実「戦時期日本の研究開発体制」（『大阪大学経済学』54-3、2004）、青木洋・平本厚「科学技術動員と研究隣組」（『社会経済史学』68-5、2003）等がある。リーダーシップや事務処理能力に欠ける私の性格からは、彼らを架空の「共同研究」仲間と見做して、自分は共同研究の歴史を近世にまで遡って見る事ができたらと空想している。

明清イスラーム文献からの視点 ——回儒の著作研究会の歩み——

青木 隆（日本大学）

回儒の著作研究会は、2001年度まで5年間行われた文部科研究費創成的基礎研究「イスラーム地域研究」という研究プロジェクト（佐藤次高代表）のワーキング・グループとして1999年3月に発足した。中国イスラーム思想の代表的文献である劉智『天方性理』を取り上げることになり、岸本美緒先生や小島毅先生を中心に、主として東京大学の東洋史、中国思想文化、イスラーム学専攻の院生たちが集まったのである。桑田六郎、田坂興道といった従来の中国イスラーム思想研究には中国イスラーム思想文献の内容を詳細に分析する作業が欠けていた。この作業を改めて行うに際し、中国学専攻者とイスラーム学専攻者の双方が集まり、双方の視点から中国イスラーム思想を立体的に捉えようというのが当初の目的であった。

「イスラーム地域研究」プロジェクトの下にあった3年間、研究会は主に劉智『天方性理』の読み合わせを行い、ときには関連のある多彩な研究者をお招きして研究報告をいただいた。研究会のメンバーも、1年目は東大の院生ばかりであったが、2年目からはプロジェクトの費用で、この問題に深い関心を持つ関西大学と京都大学の大学院生に参加してもらうことができ、10名を超える院生が読書会に参加した。この3年間に研究会は『天方性理』全五巻のうち巻1と巻5を読み、そのうち巻1の訳註を発表した。

周知の通り、回族はモンゴルの時代までに中国に定着した西方ムスリムの末裔であるが、明代になるとイスラームの信仰を保ちつつも、アラビア語・ペルシャ語の使用が絶えてしまう。しかし明末に胡登州（1522-97）がペルシャ語・アラビア語教育を始めるようになると、中国ムスリムの間にイスラームの信仰を知的に反省する機運が生まれ、崇禎の終わりごろには、宋学の知識を持ち合わせ、漢文でイス

ラームの思想を著すムスリム知識人が登場するに至る。劉智（1655?-1745?）はこれら漢文著作を行う中国ムスリム知識人の最高峰と目されている。劉智『天方性理』は、イブン・アラビー（1165-1240）の思想、すなわち存在一性論と完全人間論を軸に、スーフイズムの信仰とその世界観をコンパクトにまとめたものである。

『天方性理』は、『本経』部分と『図伝』部分の二つに分かれている。『本経』は西方イスラーム文献の引用からなる漢訳文である。たとえば、『本経』第一章の最初の引用には双行註で昭微經とある。これは、ペルシャの著名なスーフイー詩人ヌラルディン・ジャーミー（1414-1492）の『ラワイフ』を指す。また『図伝』の方は、劉智による図にその説明文を付し、最後に『天方性理』の刊行者の黒鳴鳳のコメントを置く構成になっている。

宋学の用語でイスラーム思想を表現するとどうなるのか。たとえば、『本経』の一行目に「象数いまだ形れずして衆理すでに具わる」とあるのは、まったく朱熹『易学啓蒙』の太極の箇所と同じ文言である。しかし、そこになんとなくよそよそしい印象が漂うのは、太極を連想させる宋学の用語体系を利用していながら、しかも肝心の太極という用語を峻拒するところにその理由があり、そこに劉智の思想表現の工夫が存する。

劉智以後の学者による『天方性理』注釈には、漢文で書かれたものとアラビア語で書かれたものとが存在する。漢文によるものには、劉智と同時代の黒鳴鳳『性理本経注釈』がある。アラビア語によるものには、馬徳新（1794-1874）『本経五章訳解』および馬聯元（1841-1903）『シャルフ・ラタイフ（性理微言注解）』があり、馬聯元には別に『本経』のアラビア語訳『ラタイフ（性理微言）』もある。アラ

ピア語訳の一例を挙げれば、『天方性理』図伝の最初無称図の円の真ん中の「有」を、馬聯元はウジュード（存在）とアラビア語訳している。

中国学専攻者が漢文文献を用いて『天方性理』の訳文と注釈を作成し、イスラム学専攻者が劉智の典拠として挙げているペルシャ語・アラビア語文献の引用箇所と同定と、アラビア語で書かれた『天方性理』の注釈書の内容を報告する、という形で研究会はスタートした。両者の報告をつつきあわせ、劉智のイスラーム思想用語辞典を作成しようというのが当初の目論見であった。ところが、巻1を読み終わった段階で、この構想は頓挫した。劉智の翻訳の仕方が厳密な逐語訳でないため、イスラームの思想語の訳語として確認できる劉智の漢語が意外にも数えるほどしかなかったのである。劉智のターミノロジーがつかめなかったため、中国学専攻者の側の報告とイスラム学専攻者の側の報告とをうまく接合することができず、このとき私たちが作った巻1の訳註は、漢文世界の劉智とイスラム世界の劉智に分裂してしまった。アラビア語による清末の『天方性理』注釈を見ると、劉智『天方性理』の理解をめぐるおもしろい問題点がたくさん出てきているのに、なかなか肝心の『天方性理』の翻訳や解説に有機的に結び付けて議論することができず、歯がゆい思いをした。

2002年3月にプロジェクトは終了したが、その後も回儒の著作研究会は活動を続けた。このときの継続メンバー5名がそのまま現在に至っている。アラビア哲学の仁子寿晴（東京大学助手）、中央アジア文化史の中西竜也（京都学園大学講師）、回民社会史の黒岩高（武蔵大学助教授）、中国科学史の佐藤実（関西大学講師）、中国文学思想の青木隆（日本大学助教授）である。プロジェクト終了後しばらくは研究会のための旅費の工面に困ったが、近年になって三菱財団の助成金や文部省の科研費により、時間の許す限り研究会を行うことが可能になった。研究会と合宿を通算して、現在年間で3週間程度を費やしている。

プロジェクト終了後は、前回の失敗を反省し、『天方性理』とアラビア語の『天方性理注釈』の両方を有機的に接合して『天方性理』の注釈史にもなるよ

うな訳註を作成しようと考えた。そのため、アラビア語・ペルシャ語文献担当のメンバーにも『天方性理』図伝の訳註作成を積極的に担当してもらい、イスラム学専攻者のメンバーの意見を訳註作成に反映しやすくした。すると狙いあたり、研究会の議論が活性化した。それぞれの専門の立場から提出する劉智像が一致することがないのはもちろんのこと、お互いの解釈がお互いに理解できないことさえしばしばだったが、とにかく議論ができるようになった。その結果、『天方性理』には一般的な中国思想とイスラーム思想のどちらにも還元できないような劉智独自の思想が含まれていることが次第にわかってきた。また、拙いものながら研究会の成果として刊行している『天方性理』訳註も、議論を尽くし全員が納得した上で訳文を決定し、その議論の過程がある程度わかるような記録として語釈と解説を書くというスタイルに変わってきた。

中国とイスラームを往来する細かい議論を繰り返していると、やはりお互いに中国思想やアラビア・ペルシャの思想文献の日本語訳がもっとたくさんあったら、とつくづく思う。日本にはイスラム学と比較にならないくらい中国学の蓄積があるけれども、少なくとも『天方性理』の訳註を作るうえで参照したい近世の中国思想にかんしてはそのほとんどが現代日本語に翻訳されていない。たとえば、朱子学の立場に立った四書の全訳はあっても、四書集註の全訳はない。イスラム学専攻者たちにとっては、朱熹の四書解釈そのものよりも、四書を解釈するにあたって彼がどのような議論を展開しているかの方に興味がある。イスラーム思想を漢文で記述するにあたって劉智が宗学の漢文表現を取り入れているのだから当然である。

いま、外部の視点を中国学の内部に取り入れることによって中国学を活性化させる試みが考えられているとすれば、中国学の外部の人にわれわれのふだん親しんでいる文献を利用しやすい形で提供するのは、とても意義のあることである。研究会の乏しい経験から言っても、中国学の外部の研究者はきっとわれわれと異なる視点で研究をするに決っているからである。

中国学にとっての学理的反省

馬場 公彦 (岩波書店)

大東文化大学で行なわれた第58回日本中国学会大会での講演会で話をする機会を与えられる光栄に浴した。だが勤務先の公務のため出席できず、ビデオ参加というおそらく前代未聞の異例の形で務めを果たすことになった。聴衆の方々はずいぶん戸惑われただろうが、主催者の三浦國雄学会理事がご提案下さった窮余の一策に甘えさせていただいた。

公務というのは毎年ドイツ・フランクフルトで行なわれる国際ブックフェアへの派遣を命じられたのだった。私個人としては今年が3回目の参加となったが、101カ国から7千社あまりの出版社が集う、世界最大のブックフェアであって、8つの巨大ホールを埋め尽くす各出版社ブースの壮観さにまたも圧倒された。版權の売買が主な目的だが、日本の出版社はコミック系を除けば総じて売る成果はほとんどなく、商談の大半は欧米系出版社の英語・ドイツ語・フランス語の出版物の版權を買う事に費やされる。

ただ近年、ささやかな異変がある。一つは日本の版權が韓国・中国を中心に売れるようになってきたことだ。逆に日本の出版社が韓国・中国の版權を買って翻訳出版する例は寥々たるものだから、東アジア域内の書籍コンテンツ市場においては、いまだに日本が一頭地を抜いていると言えるだろう。もう一つは欧米系の出版社における中国関連の出版物の増加ぶりだ。その多さは日本関連の書目と比べると歴然としていて、中国への関心の高さがうかがえる。今回、ハイデルベルグとパリに足を伸ばしてハイデルベルグ大学や高等社会研究院や国立東洋言語文化大学の数名の日本学研究者にヒアリングしたが、日本学に比して中国学の学科規模のほうが大きくなりつつあるという。

日本人のアジアに対する関心が広がり、アジアに対して抱くイメージが様変わりしたのは、80年代以降

の中国の改革開放政策の拡がり、とりわけ88年のソウル・オリンピックが大きな契機だったと思う。それを牽引したのは映画・ポップス・漫画・アニメ・テレビドラマなど大衆文化のアジア域内での相互浸透であって、『冬のソナタ』『チャングムの誓い』などの韓流テレビ・ドラマや、「女子十二楽坊」といった中国ポップスや、『JSA』『カンフー・ハッスル』などのアジア映画の興行的成功が記憶に新しい。

翻って出版業界を見ると、その間せいぜいユン・チアンの『ワイルドスワン』（講談社、1993年）、宋強等『ノーと言える中国』（日本経済新聞社、1996年）くらいしかベストセラーが思い浮かばない。中国特需、中国市場進出、日中の企業合併など、実業界に見られるような活況が広告業界を含む文化産業にも波及しているわけだが、そのような景気のよさが、出版業界だけには見当たらない。

かつてよく読まれた岩波文庫の孫文『三民主義』、毛沢東『実践論・矛盾論』などは、久しく品切れのままだ。孫文や毛沢東がもはや經典としての光彩を放たず、たんなる歴史文献程度の意味合いしか持たなくなってしまったのかもしれない。では出版界は孫文・毛沢東に代わる近代の古典を発掘し普及する努力をしてきたのだろうか。岩波文庫にはかろうじて巖復『仁学』（1989年刊）、『章炳麟集』（1990年刊）があるが、それもどこまで在庫を抱えていられるかどうか。出版業界では、現実の中国との距離はむしろ遠ざかっているというが率直な印象だ。

理由の第一は出版業界の保守性。百分近い識字率があって、日本語という共通言語を解する国民1億2千万人を擁する国内市場に支えられた日本の出版業界にあっては、言語を異にする中国市場への進出など顧慮する必要はなかった。『論語』『三国志演義』『唐詩選』といった古典の定番の受容層を当て込ん

で置けばよかった。いわば商品開発の立ち遅れ。

第二は編集者の不作為責任。言語の壁があって意思の疎通が難しいとか、翻訳に手間とコストがかかるとか、読者の顔が見えにくとかいったことを口実に、現実中国との接点を模索する努力も、常に新たなテーマと書き手を開拓する手間も惜しんできた。

いわば研究開発の立ち遅れ。

第三は学術界の不振。中国との学会交流や研究者の往来、大学間の単位交換・留学生交流などの提携はますます活発になっているが、学術界の国境を越えた活動や成果が学会内部のみで消費されていて、一般読者への関心に応えていない。いわば社会的貢献の不足。講演ではこの第三の要因を取り上げ、日本の中国学の現状に対し、学理的反省を呼びかけた。

おりしも2006年の10月、私にとっては岩波講座の『「帝国」日本の学知』全8巻を完結させる節目の時期でもあった。この講座は近代日本の「帝国」化の過程で構築されていった諸学の形成と展開を歴史的な文脈のなかに位置づけるもので、諸学の来歴を問う学理的反省を通しての批判的継承を目指した。とりわけ岸本美緒編『第3巻 東洋学の磁場』、末廣昭編『第6巻 地域研究としてのアジア』は、アジアを対象とする学知のありようを、かたや地域研究から、かたや中国学からトレースしたものだ。

中国学は、かつて漢学に淵源し、近代以降、ヨーロッパのシノロジーの影響下に発展し、豊穡な東洋学の中核を占め、同時に中国現地での組織的調査の成果をも吸収しながら発展してきたアマルガムであって、近隣諸学との提携を通して総合的な学知として機能してきた。

ところが、日本の敗戦によって中国という研究のフィールドを失った。中国革命から新中国成立にいたる歴史的現実を前にして、伝統中国との連続性と断続性という問題に決着をつけられなかった。朝鮮戦争、台湾海峡危機、中ソ対立、中国国内の路線対立とめまぐるしい変化に翻弄され、文化大革命の認識と評価をめぐる沈黙を貫いた。いまの中国学は、現実中国のめまぐるしい変化と表面的にはほとんど何の接点も見当たらず、漢学的（より狭義には経学的）要素に純粹化していく先祖返り現象を起こして

いるかのように映る。

中国学が現実の中国に対する関心に応えていない現状は、中国学が時代的な要請を受けながら意識的に現実中国から退却し、アマルガムの一部のみを純潔化した結果に過ぎないのではないか。中国学は伝統中国を対象にし、現実中国を対象にしないとの認識があるとすれば、それは決して中国学本然の姿ではなく、後知恵の理由付けでしかないのではないか。

その一つの証左として、戦後直後に創刊された月刊誌『世界』での最初の中国特集である「中国の現状をどう見るか——シナ学者のこたえ」（1949年8月号）では、新中国成立を目前にした中国革命の歴史的意義について、仁井田陞、吉川幸次郎、平岡武夫、松本善海、貝塚茂樹などの中国学界の重鎮たちが、中国の変革に瞠目し、自らの研究の視角を問いなおし、新たな枠組みの構築を訴えている。伝統中国を研究対象としてきた彼ら中国学者にとって、共産中国という新たな政権が確立したことのインパクトの大きさが伺える。

第二の証左として、竹内好（『現代中国論』1951年など）、武田泰淳（『新漢学論』1935年、『経書の成立』と現実感覚』1947年など）といった現地派の中国文学者は言わずもがなだが、津田左右吉（『日本における支那学の使命』1939年など）、吉川幸次郎（『支那学の問題』1940年、『支那学の任務』1941年など）といった支那学者の支那学方法論議を見ても、方法的対立、学理的立場の相違を超えて、現実中国に対する鋭い問題関心が濃厚に読み取れる。直接に現代中国を研究せよとは言っていないが、どこにも伝統中国への回帰など提唱していない。

中国学と地域研究者とのつながりが希薄になることで、地域研究がその方法として備えていた政治学・経済学・社会学といった社会科学諸学理とのつながりも失われつつある。また、考古学・人類学・民俗学・宗教学・言語学・科学史といった隣接の諸科学との連携も弱まっている。東洋学という名の近代に源を発する大河は、いまやさまざまな支流へと枝分かれして、細い流れになっていき、中国という現場を離れていきつつあるのではないだろうか。

国外流出資料の発掘と中国学の新たな展開

～イベリア半島における漢籍調査をもとにして～

井上 泰山 (関西大学)

中国と西欧諸国との文化交流の歴史を問い直すにあたって欠かせない作業は、西欧諸国に流出した漢籍の総量を把握することである。それは西欧における漢学発達史や東西交渉史に関連する様々な問題を考える上で前提条件となるだけでなく、そこに、わが国における今後の中国学が取り組むべき課題に対するヒントも隠されているように思われる。

西欧諸国における漢籍の収蔵状況に関しては、近年、次第に個別の情報が公開されつつあるが、イベリア半島の状況については、いまだに十分な調査は行われておらず、最も情報の乏しい地域であるといえる。

こうした状況をふまえ、筆者は、勤務先である関西大学から、平成17年度前期在外研究員の資格を与えられ、4月から9月までの半年間にわたって、イベリア半島各地の修道院や宮殿の図書館、あるいは公共図書館などに収蔵されている漢籍の調査を行い、一定の成果を得ることができた。調査のために訪れた機関は、スペインでは14、ポルトガルでは8、合計すると22の機関に及ぶが、ここでは、それらのうち、質量ともに重要な位置を占めると判断されるマドリッド及びその近郊の2つの都市にある4つの機関、乃ち、(1)スペイン国立図書館、(2)トレド聖堂参事会図書館、(3)エスコリアル修道院図書館、(4)マドリッド王宮王室図書館、における漢籍の収蔵状況について、その概要を報告し、併せて、中国学が直面する課題について、若干私見を述べてみたい。

(1) スペイン国立図書館の漢籍

同館には合計70種類の中国関連書籍が現存するが、うち10点は中国近世白話小説であり、『説岳全伝』(1801年刊)『飛龍伝』(1805年刊)『雷峯塔』(1806

年刊)など、書名自体は特に珍しいものではないが、書肆に注目してみると、中には「敬業堂」版や「禅山會文堂」版など、珍しい版本も含まれており、今後詳細に調査すべき貴重な書物であると考えられる。なお、同図書館の収蔵漢籍及びその書誌については、『関西大学中国文学会紀要』第27号(2006)誌上に「スペイン国立図書館所蔵漢籍目録(古典の部)」と題する報告を掲載した。

(2) トレド聖堂参事会図書館の漢籍

同図書館には、以下に示す6点の漢籍が保管されていることが判明した。

- 1 『大方廣佛華嚴經』巻第54/1345(元至正5)年抄本
- 2 『少微先生高明大字資治通鑑節要』5・6・7巻/刊本、明代?
- 3 『明解増和千家詩集』3・4巻/1574(明萬曆2)年、金陵王氏廣勤堂刊本
- 4 『新鵝梅竹蘭菊四譜』黃鳳池緝/1620(明萬曆48)年、集雅齋刊本
- 5 『妄推吉凶辯』南懷仁著/1669(清康熙8)年刊本
- 6 『坤輿圖説』下巻、艾儒著/1674(清康熙13)年刊本

6点のうち4点までが明代以前の抄写又は刊行に係るものと推定される。収蔵点数こそ少ないものの、刊行年代が相当に古く、特に、1の抄本『大方廣佛華嚴經』、及び3の刊本『明解増和千家詩集』は、これまで存在が知られていなかった稀覯本である可能性がある。現地滞在中に全ての資料を電子化する作業を完了したので、今後詳細に研究した後、各文献に関する報告を執筆する予定である。なお、3の『明解増和千家詩集』に関しては、既に、『汲古』第

49号(2006)誌上に小論「トレド聖堂参事会図書館蔵『千家詩』(万暦刊本残巻)について」を寄稿した。また、『関西大学文学論集』第56巻第2号(2006)誌上にも、「トレド聖堂参事会図書館の蔵書について」と題する報告を執筆した。

(3) エスコリアル修道院図書館の漢籍

同図書館には、16世紀にもたらされた漢籍として、以下の6点が存在する。

- 1 『少微先生高明大字資治通鑒節要』20巻／張氏進賢堂板／1541年刊本
- 2 『徐氏家傳捷法鍼灸』2巻／明德堂板／1531年刊本
- 3 『三國志通俗演義史傳』10巻／1548年刊本
- 4 『新刊補訂源流總龜對類大全』
- 5 『類編曆法通書大全』
- 6 『風月錦囊』／1553年重刊

同図書館に収蔵されているこれらの書物に関する書誌その他については、孫崇濤氏の『風月錦囊考釈』(中華書局、2000年7月刊)に詳しい。

(4) マドリッド王宮王室図書館の漢籍

同館においては、4点の漢籍の存在を確認することができた。

- 1 『舞劍集』3巻／崇徳堂／1672年刊
- 2 『易經大全』24巻／1750年刊
- 3 『易解』6冊／1750年?刊
- 4 『仁安堂四書真本』仁安堂／1762年刊

これらの他にも、例えば、清代の北京で実際に行われていたと思われる大道芸の様子を描いた線画や、満州族の風習を描写したと思しき極彩色の絵画、様々な想像上の動物を描いた絵画などもある。因みに、1の『舞劍集』は、草書に関する指南書である。

西欧各国に流出した漢籍は膨大な量にのぼるはずである。仮にそうした資料が全面的に公開されれば、これまで存在しなかった全く新しい学問分野が開拓される可能性がある。

そこで考えるべきことは、新資料の発掘という課題に対して今何ができるか、という問題である。現

段階では誰もが個別の勤務先を通して海外に赴き、単発的に調査を行っている状態であるが、そうした個人的な作業に頼ってはいけず、早期の全面的な調査は望めない。そこで、敢えて提言すれば、学会としても、特別の漢籍調査プロジェクトチームを結成して、年次計画的に西欧に流出した漢籍所蔵調査に乗り出すくらいの意気込みがあっても好いのではないか。もちろん、そのための独自の予算化も必要となるであろうし、場合によっては、科学研究費などとの連携も視野に入れる必要があるだろう。そして、将来的には、西欧各国所蔵漢籍の全てのデータベースを日本で構築管理し、中国はもちろんのこと、全世界に向けてサービスを提供するくらいの気構えがあっても好いのではあるまいか。

筆者は、資料の存在こそが学問の方向を決定づける、と信じるものである。新資料の発掘は常に新たな学問分野を生む可能性を秘めている。新たな理論の構築、実証的手法による新事実の解明、あるいは研究組織の見直し等も、中国学の未来像を展望する際に必要であるに違いないが、それらはひとえに新資料の発掘とも密接に関わっていると考えられるだけに、当面取り組むべき喫緊の課題の一つとして、西欧各国に散在する漢籍のデータベースをできるだけ早期に構築することの必要性を改めて問いかけたいと思うのである。

各種委員会報告

[大会委員会]

竹村 則行

日本中国学会第58回大会は、10月8-9の両日、都の更なる西北に展開する私学（斯学）の雄たる大東文化大学で開催され、研究発表28名、シンポ報告4名の意欲的な発表があった。林克代表を始めとする関係者のご尽力に感謝申し上げたい。例年通り多くの若手の発表があったが、これに中堅、大家の報告が加われば、更に重層的に充実したであろう。

大会初日に開かれた大会委員会で話し合われたことの概要を、備忘を兼ねて以下に報告する。

①次次回大会の開催校について…関係者のご協力によって、幸に59回名古屋大、60回京都大開催が決定しているが、第61回をどこに依頼するか、更に西下するか、関東その他地区へ反転するか、意見を交換した。この1年をかけ、じっくり協議したい。

②開催校の条件…近年の参加者増に伴い、開催校には大中教室や懇親会会場の設備が求められる。更に当日の案内進行等の実務が加わるので、相応の教員と学生の規模を有する大学院大学が開催候補校として絞られる。

③むろん②は限定的なものではないが、中国哲学文学の博士課程を有する大学院は、基本的にこの条件を満たすものと考えられ、これらの大学院には、よほどの事情がない限り、相応の順番によって大会開催を引き受けて下さることを希望する。

④新設のホームページ特別委員会を通じて、過去の日本中国学会開催校一覧をホームページ上に載せることにし、過去開催歴の閲覧の便を図りたい。

以上です。次回59回大会は2009年10月7-8日、名古屋大学で開催されます。

[論文委員会]

三浦 國雄

10月8日、大会開催中の大東文化大学において、2006年度第1回論文審査委員会を開いた。

[報告事項]

1、学会報58集の発行

本集の編集・出版作業は比較的順調に進んだ。

2、第59集の依頼論文

以下の各氏に依頼して承諾を得た。5月28日の第1回理事会で承認済み。

哲学・思想部門 竹内 弘行（評議員）

松村 巧（一般会員）

文学・語学部門 富永 一登（評議員）

飯塚 容（一般会員）

3、日本学術振興会奨励賞の推薦

『学会便り』（通巻8、9号）に記したように、昨年6月、独立行政法人日本学術振興会より本学会にも上記の推薦依頼があり、論文委員会が主体となって評議員の意見を徴しながら人選を進めた結果、本学会としては齋藤希史氏を推薦することにし（『漢文脈の近代』をはじめとする一連の業績による）、理事会の承認を経た上で推薦書一式を提出した。

本件は、実はまだ採否の結果が出ていないのであるが、まずもって学会として推薦したという事実が重要なので、昨10月7日の理事会の承認に基づき、この紙面を借りて被推薦者名を広く学会員にお知らせする次第である。

[審議事項]

1、次回委員会日程

①1月28日（日）査読者・閲読者選定会

②3月30日（金）掲載論文（第59集）・学会賞（第58集）決定会

2、修正原稿の締め切りの確認（一般原稿、依頼論文共通）

閲読者（論文審査委員がこれに当たる）の責任において査読者の意見を付帯した掲載決定論文は、いったん執筆者に戻される。執筆者は修正を加えたあと、4月30日までに閲読者に返送する。ここで再度閲読者のチェックが入った場合、執筆者は閲読者のOKが出るまで原稿に手を入れ、最終的に5月31日までに編集担当校（第59集は大阪市立大学）に送付しなければならない。最終締め切りは依頼論文も共通である。もし遅延した場合には不掲載もあり得ることを確認した。

[追記]

- 1、上記の締め切り問題であるが、原稿が全て揃わないと印刷所に入稿できないし、それに英文のサマリーはまとめて東方学会のネイティブにお願いしているので、5月31日という期限は厳守をお願いしたい。入稿、それに校正原稿の戻しの遅れは刊行時のミスを誘発し易い。
- 2、上で「本集の編集・出版作業は比較的順調」と書いたが、実は小さなトラブルはなかった。一般投稿論文で一件、執筆者と連絡がつかず、初校ゲラが長期間返ってこないという事態が発生した。さいわい、指導教官の協力を得て事なきを得たが、掲載決定者におかれては、4月から9月にかけて長期間「原稿整理原票」記載の原住所を留守にされる場合には必ず編集担当校に連絡されたい。
- 3、これは丸尾理事長の示唆を得て、本委員会で話し合われた事柄であるが、投稿者におかれては、自身の論考の難訓字にもっと積極的にルビを振っていただきたい。言うまでもなく本学報は中国学の総合誌であり、該論文を読むのはその分野の専門家だけとは限らないし、それ以前に、当の御本人が正確に訓めているかどうか分からないからである。

新役員一覧

日本中国学会 平成19・20年度役員構成

理事長

池田 知久

副理事長

池田 秀三 竹下 悦子

理事

神塚 淑子	川合 康三	金 文京
佐藤錬太郎	竹村 則行	土田健次郎
富永 一登	花登 正宏	藤井 省三
堀池 信夫	渡邊 義浩	

監事

安藤 信廣 大木 康 林 克

幹事

齋藤 希史 中川 諭

日本中国学会評議員会 平成18年10月7日確定

日本中国学会 平成19・20年度評議員

相原 茂	青木 五郎	浅野 裕一
吾妻 重二	安藤 信廣	池田 秀三
池田 知久	市川 桃子	市来津由彦
伊東 倫厚	井波 律子	岩佐 昌暉
植木 久行	宇野 茂彦	江上 幸子
大上 正美	大木 康	大島 晃
岡崎 由美	尾崎 文昭	門脇 廣文
釜谷 武志	神塚 淑子	川合 康三
金 文京	合山 究	後藤 秋正
小松 建男	小南 一郎	坂元ひろ子
佐竹 保子	佐藤 進	佐藤普美子
佐藤錬太郎	柴田 篤	白水 紀子
杉山 寛行	須藤 洋一	高木 重俊
竹内 弘行	竹下 悦子	竹村 則行
土田健次郎	戸倉 英美	富永 一登
中嶋 隆蔵	野間 文史	野村 鮎子
花登 正宏	林 克	平田 昌司
藤井 省三	古屋 昭弘	堀池 信夫
松本 肇	三浦 國雄	三浦 秀一
向嶋 成美	吉田 公平	渡邊 義浩

日本中国学会選挙管理委員会 平成18年7月1日確定

[出版委員会]

委員長 川合 康三

2006年7月22日、10月8日、いずれも大東文化大学において出版委員会を開きました。主な審議事項は以下のとおりです。

- 1) 『学会報』58冊掲載の学界展望について、全委員があらかじめ原稿を読んだうえで意見を出し合い、担当者にそれを顧慮して最終稿執筆を求めました。
- 2) 2006年12月、2007年4月発行の「学会便り」について、編集は川合が担当することになり、掲載内容について意見を交換しました。「親しまれる学会便り」を目指してきましたが、いくらかそれも軌道に乗りましたので、今後はさらに様々な意見を提起する場にもしていこうと話しました。
- 3) 『学会報』の編集、「学界展望」の担当について、来年度再来年度の担当校、責任者を確認しました。

	19年度	20年度
編 集	大阪市立大 (斎藤 茂)	大阪市立大 (斎藤 茂)
展望・哲学	広島大 (市来津由彦)	北海道大 (弭 和順)
展望・文学	東北大 (佐竹 保子)	東北大 (佐竹 保子)
展望・語学	北九州大 (佐藤 昭)	神戸市外大 (佐藤 晴彦)

なお学界展望のコメントは、丸尾理事長、池田新理事長の意向も受けて、これまでとおり継続することになりましたが、先行するコメントのかたちにかかわらず、それぞれのスタイルで書いていただくということになりました。

[選挙管理委員会]

委員長 竹下 悦子

本年度の活動は、役員改選に伴う評議員選挙、及び理事長・監事選挙が中心となりました。それぞれの結果については、別途公表いたしましたのでここでは記しません。本報告では、新しい会則に基く初めての選挙を通して浮かび上がった問題点について整理し、次期選挙の際に生かしていただければと思います。

①投票総数の減少について

新しい選挙規約では、評議員の総数が60名になりました。会則の改正により、投票の権利を持つ会員が増えることを前提とした数字だったのですが、今回の選挙では投票総数が前を下回りました。選挙管理委員会では、その理由と対策を検討し、次回の理事会において具体的な提案をしたいと考えております。目下、10名連記について、10名を義務ではなく権利にしてはどうかという意見が多数聞かれており、十分議論を尽くしていく予定です。

②投票結果の公表について

本年度の大会開催前日に行われた次期（19・20年度）評議員による評議員会において、評議員選挙の投票結果（投票数）を公表すべきではないかという意見が出されました。これについては、委員会で検討した結果、選挙管理委員会は独立した組織として他の機関から委託を受けて存在しているスタイルをとっていないこと、また、現在の選挙の状況は、立候補した候補者に投票する形ではないこと、したがって、得票数を公表することが、得票者にとって決して好ましくないであろう状況が十分考えられることなどから、委員会としては公表に向けての提案はしない方針を確認しました。

[将来計画特別委員会]

委員長 池田 知久

A. ホームページ特別委員会の設置について

本学会の中に、新たにホームページ特別委員会を設けることになりました。そのために、去る平成18年10月の理事会・評議員会において、本委員会の提案に基づいて「委員会規約」が以下のように改正されました。(本誌の「学会ホームページの一層の充実をめざして」を参照してください。)

「委員会規約」(該当部分のみ抜粋、下線部が改正箇所)

- 1 ……当分の間、将来計画特別委員会・ホームページ特別委員会を置く。
- 3 委員会の任務
 - (7) ホームページ特別委員会
 - a ホームページ(日本語版・英語版・中国語版)の作成と更新。
 - b 学会諸事業の予告と案内、各種委員会の議事報告、電子メールによる照会・問い合わせの窓口対応、中国学関連のホームページへのリンク、などを行う。
 - c データベースの作成・管理・公開(学会報や学会発表要旨を含む)など。
 - d その他

B. 顧問推薦規定の整備について

現在、本学会には「顧問」を推薦する規定がありません。そのために、旧会則の「名誉会員」を推薦する規定を準用しています。そこで、その規定を作成するために、平成18年3月と10月の本委員会において審議を行いました。その結果、以下

のような成案を得て、10月の理事会に報告いたしました。

評議員会は、理事会の発議に基づき、以下の会員を顧問に推薦する。

- (1) 原則として評議員歴10期以上かつ満70歳以上の会員。
- (2) 理事長経験者で満70歳以上の会員。

しかし、時間不足のために理事会でも、まだ十分な審議は行われていません。ここでは、これを中間報告として、会員の皆さんにお知らせいたします。

C. 中国学の地盤沈下の回避策について

本委員会の任務の一つに、「大学入試(漢文・中国語)／中国語教育等の問題」があります。この視角から、中国学の危惧すべき将来についても、研究推進・国際交流委員会と連携をはかりつつ、今後幅広く議論していくこととしました(平成18年10月委員会)。

平成18年度学会員動向

●会員動向（平成18年11月1日現在）

総会員1,994名、準会員62機関、賛助会員6社

●本年度『学会便り』第一号発行以来判明した、11月1日現在の物故会員は以下の通りです。

（五十音順 敬称略）

関東地区 佐藤 隆則
藤塚 明直
近畿地区 金谷 治
九州地区 隈本 宏

●退会会員

○退会申出会員 計30名

今泉潤太郎	小澤 隆義	寛 久美子
柿本 裕子	金丸 邦三	久保田智広
栗山 明	小林 祥浩	小松 英生
三宝 政美	秦 嵐	鈴木(砂岡)和子
高橋 愛彦	竹之内美樹香	能勢 良子
肥田 明啓	平山 久雄	古田 博司
深沢 一幸	星 滋子	前嶋 浩
真壁 智誠	宮内美智子	美山 督
村田栄三郎	山口 澄子	山口 三夫
山田 眞一	山田 美佐	山本 昭

○四年会費未納による退会会員 計30名

●住所不明会員 計54名

荒木ラン子	伊藤 美晴	林 泰弘
岩見 輝彦	武 宇林	植松 公彦
笈沼 恵一	王 宣瑗	王 勉
大西 克巳	岡田 直子	小川 貴宏
荻野 友範	金川 朋絵	川島さおり
姜 若冰	金 敬雄	工藤 明美
洪 若英	高 秀華	上妻 宗周
小寺 春水	後藤 淳一	佐藤 貢悦
佐藤奈津子	島津 京淳	清水 篤
周 先民	水津 有理	角田 達朗
薛 羅軍	戴 寧	田中 紀子
谷津 康介	張 健	張 猛
趙 立男	陳 洪傑	陳 仲奇
長村 美慧	馬 清華	白 小薇
堀田 洋子	堀江 智子	松下 愛理
宮内 四郎	山崎 秀穂	山田 史生
山本 透江	李 彤	劉 静華
林 松涛	和賀井 聡	若松 信爾

平成18年度新入会員一覧

10月7日開催の評議員会で入会が承認されたのは、以下の通りです。

●通常会員 20名

- 池田 昌広 近畿 佛教大学研究員
〒616-8322 京都市右京区嵯峨野芝野町26 嵯峨野ハイツ215号
- 瀬川 智 九州 九州大学(院)
〒819-0025 福岡市西区石丸2丁目32番地10号
- 王 閏梅 中部 名古屋大学(院)
〒464-0851 名古屋市千種区今池南30-10 大久手マンション423室
- 加賀沼伸江 東北 東北大学(院)
〒981-0212 宮城県宮城郡松島町磯崎字白萩124
- 韓 燕麗 近畿 京都大学人文研究所
〒606-8357 京都市左京区聖護院蓮華蔵町26 八星マンション21号
- 草野 友子 近畿 大阪大学(院)
〒604-0021 京都市中京区室町通二条下る蛸薬師町288
- 高 彩雯 関東 東京大学(院)
〒132-0031 江戸川区松島3-16-3-201
- 鈴木 崇義 関東 國學院大学(院)
〒355-0026 東松山市和泉町6-41
- 田中 靖彦 関東 東京大学(院)
〒156-0042 世田谷区羽根木2-3-2 坂根荘201
- 張 新力 中部 愛知工業大学
〒464-0858 名古屋市千種区千種1-3-3
- 張 文菁 関東 早稲田大学(院)
〒231-0023 横浜市中区山下町216-5-801
- 鄧 慶真 国外 Malaspina 大学
#428-8880 Jones Road, Richmond, B.C.V6Y3Z1, Canada
- 富永 鉄平 近畿 大阪大学(院)
〒563-0043 池田市神田四丁目12番11号
- 富山 敦史 近畿 天理市立北中学校
〒612-8081 京都市伏見区新町十二丁目310-7
- 永田 真一 関東 國學院大学(院)
〒359-1131 所沢市久米2150-9
- 巻田 洋平 関東 國學院大学(院)
〒235-0021 横浜市磯子区岡村3-25-5-206

- 舩田 佳弘 北海道 北海道大学(院)
〒060-0818 北海道札幌市北区北18条西13丁目 北海道大学恵迪寮F棟308
- 山田 和大 中国・四国 広島大学(院)
〒734-0025 広島市南区東本浦町16-3-202
- 吉田 文子 関東 お茶の水女子大学(院)
〒680-0062 鳥取市吉方町1丁目570-1
- 林 桂如 関東 東京大学(院)
〒145-0063 大田区南千束3-19-4-103

尚、以下の6月入会者については、本年度の名簿に掲載されています。

●通常会員 20名

- | | | |
|-------|-------|-------|
| 伊崎 孝幸 | 一澤 美帆 | 岩田 和子 |
| 王 俊文 | 大角 紘一 | 岡本 淳子 |
| 嘉村 誠 | 蔡 麗玲 | 猿渡 留理 |
| 白井 重範 | 鈴木 拓也 | 石 立善 |
| 高井 龍 | 田村 彩子 | 陳 文輝 |
| 野村 友平 | 平塚 順良 | 古橋 紀宏 |
| 水本 圭亮 | 劉 岳兵 | |

●賛助会員 1社

- 株式会社 亜東書店

平成18年度 日本学術振興会科学研究費補助金採択状況一覧

(単位：千円)

特定領域研究

- 東アジアにおける死と生の景観 6,800
藪 敏裕(岩手大学)
- 日中通俗文芸の体系化を目的とした先駆的研究—小説・芸能を中心論題として 3,100
勝山 稔(東北大学)
- 東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成—寧波を焦点とする学際的創生—：総括班 29,800
小島 毅(東京大学)
- 歴史書編纂と王権理論に見る東アジア3国の比較 9,700
小島 毅(東京大学)
- 朝鮮思想と中国・ヨーロッパ—東アジア海域交流のなかで 4,800
川原秀城(東京大学)
- 宋元明における仏教道交交渉と日本宗教・思想 5,900
横手 裕(東京大学)
- 宋代浙江の茶文化の研究—茶の湯文化の源流として 4,600
高橋忠彦(東京学芸大学)
- 寧波における知の営みとその伝統—学脈・宗族・トポフィア— 4,500
早坂俊廣(信州大学)
- 五山文学における宋代詩文の受容と展開—詩文集の注釈と詩話を中心に— 6,300
浅見洋二(大阪大学)
- 儒学テキストを通しての近世的思考様式の形成—日中における対照的研究— 6,200
中村春作(広島大学)
- 散楽の源流と中国の諸演劇・芸能・民間儀礼に見られるその影響に関する研究 5,400
加藤 徹(広島大学)
- 日記および文集に見える宋元時代の東アジア交流と両浙地域の社会、経済 6,200
遠藤隆俊(高知大学)
- 日本における中国古典文学の伝播とその展開に関する研究 6,800
静永 健(九州大学)
- 中国東南部の学術と図書の収集・出版・流通 4,300
高津孝(鹿児島大学)

- 中国思想文献の近世日本社会への伝来とその流通—新儒教と医学思想の文献を中心として— 6,900
恩田裕正(東海大学)
- 浙江・江蘇地域の道教・民俗信仰に関する廟宇・祭神・儀礼調査 6,200
二階堂善弘(関西大学)

萌芽研究・新規

哲学

- 中国北朝墓誌中の同一刻法の分布に関する研究 300
澤田雅弘(群馬大学)

文学

- 周辺書誌学からみる敦煌文書成書年代比定に関する研究 500
玄 幸子(関西大学)

言語学

- 元刻文字資料による元代口語文法の再構築—古代・近代両漢語文法の統一的理解のために 1,300
小池一郎(同志社大学)

- 相づちによる発話権の交替についての研究—中・日両言語の対照から学習者言語へ— 1,600
楊 晶(お茶の水女子大学)

萌芽研究・継続

哲学

- 『古史辨』疑古派の成果についての基礎的研究 800
南澤良彦(九州大学)

- 明治・大正・昭和初期の陽明学運動の基礎的研究 1,500
吉田公平(東洋大学)

文学

- 中国伝統演劇の舞台効果に関する総合的研究 1,300
加藤 徹(広島大学)

言語学

- 東チベットの言語分布と伝播経路を探究するための地名研究 700
池田 巧(京都大学)

- 口語音声資料を用いた北京語の語彙的軽声の発生メカニズムの解明に関する基礎研究 500
中川千枝子(京都産業大学)

- 日本語・韓国語・中国語の漢語語彙対照データベース作成のための基礎的研究 500
水野義道(京都工芸繊維大学)

若手研究(B) 新規

哲学

- 『老子』の注釈史及び受容史を中心とした中国学術史及び思想史の研究 1,400
齋藤智寛(京都大学)

- 唐宋期における模倣の問題 800
志野好伸(明治大学)

- 近代中国における「社会」認識—思想史分析を通じて 600
川尻文彦(帝塚山学院大学)

- 同時代的視座からみた隋代仏教の教学形成過程の解明 900
長谷川岳史(龍谷大学)

文学

- 「関東州」から「満洲国」までの中国側文化メディアにかんする通史的研究 1,300
橋本雄一(千葉大学)

- 「満洲国」時期の文学に関する日中横断的研究 1,300
大久保明男(首都大学東京)

- 中国西南ナシ(納西)族の言語伝承および文字の研究 500
黒澤直道(国学院大学)

- 1949年以前の中国映画界における外国映画の受容とその影響に関する研究 1,300
菅原慶乃(関西大学)

- 民国期上海における伝統演劇の展開 1,100
藤野真子(関西学院大学)

- 日本中世禅林における柳宗元受容の基礎的研究 1,000
太田 亨(広島商船高等専門学校)

言語学

- 上中古漢語における機能語体系の通時変化のメカニズム—区域拡散の視点から— 900
松江 崇(北海道大学)

●19世紀中国語—朝鮮語対音資料の音韻論的研究 2,500
伊藤智ゆき(東京外国語大学)

●南宋・祝泌「聲音韻譜」の総合的研究 900
大岩本幸次(大阪市立大学)

史学

●考古資料・石刻史料を用いた契丹(遼)仏教史の研究 1,300
古松崇志(京都大学)

●明清期における礼学と「社会における礼教の普及」に関する研究 900
佐々木愛(鳥根大学)

●古代東アジアの諸国家と道教に関する研究 1,000
小幡みちる(早稲田大学)

●戦後台湾における文化政策の研究(1945～2000) 1,500
菅野敦志(早稲田大学)

若手研究(B) 継続

生活科学

●小説類と挿図版画による明清家具とその使用様式の研究 800
高井たかね(京都大学)

哲学

●馬王堆漢墓帛書の占術と漢代易学の発達に関する研究 600
近藤浩之(北海道大学)

●『上海博物館蔵戦国楚竹書(二)』の研究 1,800
李 承律(東京大学)

●東南大学知識人の思想に関する研究 200
野田善弘(新居浜工業高等専門学校)

●易緯の新研究—漢代易学における緯書思想の展開と行方— 700
辛 賢(大阪大学)

文学

●日本漢籍の本文形成に関する研究—五山版・古活字版を中心に— 1,000
住吉朋彦(慶應義塾大学)

●近世前期文学における明末文化の影響 1,200
伊藤善隆(湘北短期大学)

●1920年代の北京文壇における散文詩の発展 1,000
齊藤大紀(富山大学)

●中国魏晋南北朝志怪の成立背景—歴史意識・人間観・宗教 500
佐野誠子(京都大学)

●日中戦争前後の中国文壇形成と共和国建後の展開 700
中野知洋(大阪教育大学)

●明代八股文学史資料の整理と研究 1,600
鶴成久章(福岡教育大学)

●近代上海における滬劇の形成と展開 900
三須祐介(広島経済大学)

●『元史』の志と表の再編纂—大元ウルスの政治と文化の解析— 1,000
宮 紀子(京都大学)

●中国南方の祭祀芸能における神仙説話の研究 700
山下一夫(神田外国語大学)

●21世紀中国大衆消費社会における文学現象の研究 1,000
高屋亜希(早稲田大学)

●武田泰淳と中国—さらなる他者理解の可能性を求めて— 800
郭 偉(立命館大学)

●戦後台湾社会における「日本語人」の文化活動及びその影響に関する研究 500
李 郁恵(立命館大学)

言語学

●現代中国語の空間表現についての研究：日本語・英語との対照を視野に入れて 300
丸尾 誠(名古屋大学)

●中国西南部・チベット=ビルマ系少数民族言語の地域言語学的調査研究 1,000
白井聡子(京都大学)

●中国古文字偏旁体系の構築 1,500
陶安あんど(東京外国語大学)

●現代中国語における領属表現に関する研究 400
勝川裕子(名古屋大学)

●明・清期ドミニコ会による漢語研究 1,100
石崎博志(琉球大学)

●17～20世紀中国における外来語史の研究 1,900
千葉謙悟(早稲田大学)

史学

●北朝隋唐期における仏教教団の宗教活動と中国の国家及び社会に対する影響の研究 700
高瀬奈津子(札幌大学)

文化人類学

●中華人民共和国・台湾における言語ナショナリズムとアイデンティティ形成 900
藤井久美子(宮崎大学)

研究成果公開促進費・①研究成果公开发表(A)

●東アジアの出版と地域文化 4,260
磯部 彰(東北大学)

基盤研究(A) 一般・新規

史学

●東アジア史上における中国訴訟社会の研究 13,500
夫馬 進(京都大学)

●南北朝～隋代における石刻造像銘の調査及びその地域史的宗教環境の研究 6,400
佐藤智水(龍谷大学)

基盤研究(A) 一般・継続

情報学

●アジア古籍電子図書館の構築の研究 9,000
大木 康(東京大学)

哲学

●両漢儒教の新研究 7,000
渡辺義浩(大東文化大学)

●〈醜〉と〈排除〉の感性論—否定美の力学に関する基盤研究— 6,700
宇佐美文理(京都大学)

基盤研究(B) 一般・新規

情報学

●中国近世白話文学の電子化状況情報及びコーパスの共有基盤の構築に関わる基礎的研究 3,000
笠井直美(名古屋大学)

科学社会学・科学技術史

●中国古代技術書の研究—王禎「農書」を中心として 4,000
田中 淡(京都大学)

哲学

●科挙に関する文献学的総合研究 7,300
佐藤錬太郎(北海道大学)

文学

●南北朝楽府の多角的研究 3,900
佐藤大志(広島大学)

言語学

●中国寧夏における回族語に関する基礎的研究 4,700
張 筱平(愛知大学)

●19世紀「官話」の諸相—「周縁(ヨーロッパ・朝鮮・琉球・日本)」からのアプローチ 8,200
内田慶市(関西大学)

史学

●東アジア仏教確立期における中国仏教石刻文物の資料的地域的研究 6,200
気賀沢保規(明治大学)

教育学

- 魯迅『解剖学ノート』の解説に基づく、20世紀初頭の留学生教育に関する事例研究 5,400
鳥途健一(東北大学)

基盤研究(B) 海外学術・新規

哲学

- 北京・天津を中心とした華北の廟会と祭祀組織「香会」の実態研究 1,600
櫻井龍彦(名古屋大学)

史学

- 中国古医籍が日・韓・越の伝統医学形成史に与えた影響の書誌学的研究 1,300
真柳 誠(茨城大学)
- 清代地方政府文書「南部県档案」の総合的調査・研究 7,000
唐澤靖彦(立命館大学)

基盤研究(B) 一般・継続

地域研究

- 東北アジアにおけるユートピア思想の展開と地域の在り方についての総合的研究 4,300
山田勝芳(東北大学)

- 漢字文化圏の「近代」に関する総合的研究 1,000

刈間文俊(東京大学)

哲学

- 江南道教の研究 3,100
麦谷邦夫(京都大学)

- 宋学西漸—イスラムからヨーロッパまで— 1,400

堀池信夫(筑波大学)

- 隋唐道教と文学 1,400
砂山 稔(岩手大学)

- 戦国楚簡の総合的研究 3,300
湯浅邦弘(大阪大学)

文学

- 日本国外に現存する日本漢籍に関する研究 2,600

佐藤道生(慶應義塾大学)

- 近世中・後期松代藩真田家代々の和歌・俳諧・漢詩文及び諸芸に関する研究 3,600
井上敏幸(佐賀大学)

- 日中朝をめぐる交流と日本古代文学についての研究—渤海使と文学・『聖徳太子伝暦』— 3,500

高松寿夫(早稲田大学)

- 近代の日本・西洋・中国における外国人イメージの総合的研究 3,200
武田雅哉(北海道大学)

- ヨーロッパ現存中国学資料の研究 3,000
上野隆三(立命館大学)

- 五山禅宗寺院に伝わる典籍の総合的な調査研究—建仁寺両足院所蔵本を中心に— 3,100

赤尾栄慶(京都国立博物館)

- 詩跡(歌枕)研究による中国文学史論再構築—詩跡の概念・機能・形成に関する研究— 2,400

植木久行(弘前大学)

- 日中戦争と中国人日本留学生の文学・芸術活動に関する総合的研究 3,100
小谷一郎(埼玉大学)

- 20世紀東アジア文学史における村上春樹の研究 2,100
藤井省三(東京大学)

- 中国近世戯曲文学の基礎的研究 3,800
赤松紀彦(京都大学)

- 近現代華北地域における伝統芸能文化の総合的研究 4,400
水上 正(慶應義塾大学)

- 中国同時代文学の潮流を概括するための基礎的研究 2,000

千野拓政(早稲田大学)

言語学

- 言語記述と言語教育の相互活性化のための日本語・中国語・韓国語対照研究 1,300
沼田善子(筑波大学)

- 香港におけるリテラシーの変遷と変異に関する社会言語学的研究 1,800
吉川雅之(東京大学)

- 中国語の構文及び文法範疇形成の歴史の変容と汎時的普遍性—中国語歴史文法の再構築— 2,700

木村英樹(東京大学)

- 中国語方言の言語地理学的研究—新システムによる『漢語方言地図集』の作成— 4,000
岩田 礼(金沢大学)

- 日本漢字音データベース(大字音表)の再構築と実用化に向けての実践的研究 2,100
湯沢賢幸(筑波大学)

史学

- 「青島鹵獲書籍」の復元と清末民国初における独英の対中国文化接触に関する比較研究 2,100

持井康孝(金沢大学)

- 『入唐求法巡礼行記』に関する文献校訂及び古代東アジア諸国間交流の総合的研究 2,600

鈴木靖民(国学院大学)

- 13、14世紀東アジア諸言語史料の総合的研究—元朝史料学の構築のために— 2,100
森田憲司(奈良大学)

基盤研究(B) 海外学術・継続

哲学

- 中国西南部の巫教祭祀における儀礼過程と口承伝承の研究 1,500
森由利亚(早稲田大学)

- 西藏自治区—青海省を結ぶ藏族の工芸美術と芸能の文化、その資料と保存に関する研究 1,000

服部等作(広島市立大学)

言語学

- 台湾標準中国語話者の声調に進行中の音声変化に関する音響音韻学的・社会言語学的研究 1,400

上原 聡(東北大学)

- 東語福寧方言群の調査研究 800
秋谷裕幸(愛媛大学)

史学

- 英仏所蔵敦煌・吐魯番出土漢文文献の古文書学的比較研究 2,200
関尾史郎(新潟大学)

基盤研究(C) 一般・新規

哲学

- 唐宋心性思想に関わるデータベース構築の試み 1,800
坂内栄夫(岐阜大学)

- 六朝隋唐時代における仏教譬喩経類の受容と道教 1,000
神塚淑子(名古屋大学)

- ベルリン・トルファン・コレクションの漢語版本の総合研究 1,500
西脇常記(京都大学)

- 五経正義の総合的研究 1,100
野間文史(広島大学)

- 『大戴礼記』に残存する『曾子』十篇についての基礎的研究 500
末永高康(鹿児島大学)

- 「洞神経」の基礎的研究 1,300
山田 俊(熊本県立大学)

- 『論語義疏』古抄本の研究 1,500
影山輝國(実践女子大学)

文学

- 日本における宋代風水思想の受容と展開に関する研究 1,000
鈴木一馨(財団法人東方研究会)

- 東洋的知に基づく「共生」思想の研究 2,000
竹村牧男(東洋大学)

- 中国イスラーム山東学派におけるスーフィー哲学の受容と変容の研究 1,300
松本耿郎(英知大学)

- 中井履軒の科学思想—その暦学・時法・解剖学 500
湯城吉信(大阪府立工業高等専門学校)
- 日本における詞の収集と整理 2,000
萩原正樹(小樽商科大学)
- 和刻本の制作—近世中期上方における明清漢籍の受容— 1,000
稲田篤信(首都大学東京)
- 国際交流の中の平安漢文学受容 1,300
佐伯雅子(人間総合科学大学)
- 中世における中国詩論についての基礎的研究 400
小野泰央(群馬工業高等専門学校)
- 日中戦争期における香港文学者と日本・中国文学者の関係図 1,800
西野由希子(茨城大学)
- 中国舟山の人形劇に見る口承文藝の研究—「説唐」故事を中心に— 1,200
橋谷(馬場)英子(新潟大学)
- 江蘇省東南部の伝統芸能と民間信仰をめぐる中国地域文化研究の試み 1,000
上田 望(金沢大学)
- 高行健を中心とした華文学の総合的研究 500
楊 暎文(滋賀大学)
- 表音文字による中国語書写の歴史的研究 900
高田時雄(京都大学)
- 明清寓言の多様性に関する総合的研究 1,000
佐藤一好(大阪教育大学)
- 明清における非古の文体と家族・ジェンダー 1,200
野村鮎子(奈良女子大学)
- 白居易を中心とする中唐「風流」文学の展開に関する研究 800
諸田龍美(愛媛大学)
- 『金瓶梅』における話法・引用の文体論研究 500
中里見敬(九州大学)
- 新中国建国前後における伝統劇の多角的な研究 2,700
松浦恒雄(大阪市立大学)
- 敦煌文献中にみられる説話文学資料の基礎的研究 1,200
荒見泰史(明海大学)
- 中国現代詩における詩意生成のメカニズム 1,100
佐藤普美子(駒澤大学)
- 『元朝秘史』研究における文学研究の構築—モンゴル英雄叙事詩研究を土台として— 1,000
藤井麻湖(愛知淑徳大学)

- 元曲復元のための崑劇歌譜群蒐集及び研究—北京藏本を中心に 2,200
石井 望(長崎総合科学大学)

言語学

- 『元朝秘史』におけるモンゴル語音訳漢字の研究 2,000
栗林 均(東北大学)
- 中国東南方言資料による「文法化」に関する記述的研究 800
佐々木勲人(筑波大学)
- 中国語普通話文法の形成及び多様性に関する基礎的研究 1,000
町田 茂(山梨大学)
- ロシア所蔵ウイグル語文献の文献学的研究 2,100
庄垣内正弘(京都大学)
- 台湾原住民諸語の普遍性と多様性に関する類型論的研究 1,400
片桐真澄(岡山大学)
- 中国保安族の消滅の危機に瀕した言語、保安語積石山方言にかんする調査研究 600
佐藤暢治(広島大学)
- 先秦漢漢語の語法研究—二重目的語文・使役文・受身文の変遷— 1,700
小方伴子(首都大学東京)
- 漢語の影響下におけるモンゴル語近代語彙の形成 600
呼和巴特爾(昭和女子大学)
- ポストコロナル香港におけるミックスコード(中英混合語)の意義と役割に関する研究 600
金丸美美(東京理科大学)
- 和刻本『笑府』四種の流布状況および所収語彙等に就いての総合的研究 900
荒尾禎秀(東京学芸大学)
- 漢語アクセントの史的研究における基礎データの構築 2,500
兼榮(坂本)清恵(玉川大学)
- 東アジア言語の破裂音の相互類似性と言語習得への干渉 1,100
福岡昌子(三重大学)
- 第二言語学習の視点からの中国語辞書の検証 1,600
山崎直樹(大阪外国語大学)
- 対面、遠隔、現地チュートリアルとの連携による中国語会話教育の高度化 1,500
村上公一(早稲田大学)

史学

- 昭和前期日本の社会・文化史と台湾—台湾知識人精神史の記録化 1,100
大谷 渡(関西大学)

- 敦煌・トルファン漢語文献の特性に関する研究 2,100
土肥義和(財団法人東洋文庫)

政治学

- 改革開放期中国における思想・イデオロギー変動 1,000
砂山幸雄(愛知大学)

基盤研究(C) 一般・継続

科学教育・教育工学

- 中国語声調の言語学的・音響学的データを踏まえたインタネット利用の指導システム 600
比企静雄(早稲田大学)

地域研究

- 中朝をめぐる歴史認識とその今日的動態についての考察 800
成澤 勝(東北大学)

ジェンダー

- 中国近代にみえるアジア間思想文化連鎖の、ジェンダー軸による研究 1,000
坂元ひろ子(一橋大学)

哲学

- 『中庸』解釈から見られる伊藤仁斎の倫理思想に関する研究 500
遠山 敦(三重大学)
- 清代における幕府と学術の関係について 500
水上雅晴(北海道大学)

- 近代中国における国学の研究 500
末岡 宏(富山大学)

- 洋務世代知識人における西洋体験と文明観の転換に関する研究 300
手代木有兒(福島大学)

- 郭店楚簡・上海楚簡を中心とする戦国時代における気の思想の研究 700
竹田健二(鳥根大学)

- 《玉歴鈔伝》について—(訳注)及び(資料集成)作成を主たる目的として— 400
川崎ミチコ(東洋大学)

- 清朝中国ムスリム学者・劉智『天方性理』における中国思想とイスラーム神秘主義 500
青木 隆(日本大学)

- 中国六朝時代の社会不安と終末観の形成に関する比較思想史的研究 500
菊地章太(東洋大学)

- 仏教資料から見た紀元二世紀頃の東西交流の研究 600
織田顕祐(大谷大学)

- 唐代禪宗思想の研究—『神会語録』の注釈的研究— 700
中島志郎(花園大学)

- 日本と中国の地理書の比較思想史的研究 800
薄井俊二(埼玉大学)
- 宋学形成前夜における仏教の動向に関する研究 500
中西啓子(新潟大学)
- 中国近現代大同思想の研究 700
竹内弘行(名古屋大学)
- 術数書の基礎的文献学的研究 2,200
三浦国雄(大東文化大学)
- 陽明後学の著作に関する文献学的研究 1,700
永富青地(早稲田大学)
- 梁啓超の功利主義思想と章炳麟の反功利主義思想における日本の契機の比較考察 700
小林武(京都産業大学)
- 本草の博物学と中国言語思想におけるパターン・モラルシステムの研究 1,200
石田秀実(九州国際大学)
- 懐徳堂学派の朱子学の研究—中井履軒の四書注釈を中心として— 500
藤居岳人(阿南工業高等専門学校)
- 中国北朝後半期の仏教の類書『金藏論』の研究 900
宮井里佳(埼玉工業大学)
- 「日本思想史学」の成立に関する史的、対照的研究—東アジアの中で— 800
中村春作(広島大学)
- 日本における靈籤の受容と展開に関する思想史的研究 700
大野 出(愛知県立大学)
- 東アジアにおける漢訳西学書の成立、伝播とその影響に関する思想史的研究 900
李 梁(弘前大学)
- 1930年代の東アジア(日本・朝鮮・中国)間の思想的葛藤と相互の関係 600
高坂史朗(大阪市立大学)
- 民衆本としての中国・芸能脚本—ヨーロッパに所蔵される曲芸刊本の収集と分析 1,100
佐々木(井口)淳子(大阪音楽大学)
- 文学
- 日本漢詩集『東瀛詩選』についての総合的研究 700
高島 要(石川工業高等専門学校)
- アジア漢字文化圏における物語と説話の研究 700
多田一臣(東京大学)
- 勅撰和歌集と中国古代礼楽思想の和漢比較研究 1,100
渡辺秀夫(信州大学)

- 中国における日本古典籍の所蔵状況とその伝来ルートに関する研究 1,800
陳 捷(国文学研究資料館)
- 『説文解字繫傳』データベースの構築 500
坂内千里(大阪大学)
- 民国翻訳史における西洋近代文芸論受容に果たした日本知識人の著作に関する基礎的研究 600
工藤貴正(愛知県立大学)
- 本邦近世校勘資料に残存せる唐詩旧鈔本文の集成 800
静永 健(九州大学)
- 日本・中国における唐代の著述に関する総合目録作成のための基礎的研究 700
孫 猛(早稲田大学)
- 中世から近世初期における朝鮮経由の『三国志演義』受容に関する研究 500
長尾直茂(上智大学)
- 「光復」期から笠詩社設立に至るまでの戦後台湾中国語詩の総合的研究 800
三木直大(広島大学)
- 『牡丹亭還魂記』校合 400
根ヶ山徹(山口大学)
- 唐宋古文の実用面に関する文体論的研究 500
東 英寿(鹿児島大学)
- 東アジア漢字文化圏の中における琉球漢詩文の位置 700
上里賢一(琉球大学)
- 詩人としての朱熹に関する基礎的研究—絶句表現の諸相を中心として— 500
宇野直人(共立女子大学)
- 陳暘『樂書』の研究 800
中 純子(天理大学)
- 1920~30年代北京・上海のメディア環境と文学界・文化界のネットワーク 1,700
清水賢一郎(北海道大学)
- 日本占領下(1937—1945)の上海文化状況に関する研究—話劇・映画を中心に— 1,200
邵 迎建(山形大学)
- 身体性を軸とした中国近現代文化史構築のための超領域的研究 500
牧 陽一(埼玉大学)
- 一九三〇年代台湾文学における「大衆」とそのリテラシー 400
四方田(垂水)千恵(横浜国立大学)
- 江戸期における詩経解釈学史の考察 800
江口尚純(静岡大学)
- 剪淞吟社資料の整理・保存及び同吟社の文学活動に対する実証的研究 1,400
道坂昭廣(京都大学)

- 中国宋代における別集の編纂に関する文学論的・社会文化論的研究 800
浅見洋二(大阪大学)
- 中国広西の鍾乳洞内に現存する古代墨書跡の資料化とその総合的研究 700
戸崎哲彦(島根大学)
- 身体論的中国近代文化史研究 1,000
遊佐 徹(岡山大学)
- 湖北省における漢川善書の宣講活動の実態に関する調査・研究 1,100
阿部泰記(山口大学)
- 中国近現代における『中国文学史』纂述に関する基礎的研究 600
竹村則行(九州大学)
- 中国における石印本小説の展開 500
丸山浩明(県立広島大学)
- 中国古典戯曲総合データベースの基礎的研究 800
千田大介(慶應義塾大学)
- 紅衛兵印刷物の研究 600
鱒澤彰夫(日本大学)
- 台湾原住民文学および言語環境に関する基礎的研究 1,100
下村作次郎(天理大学)
- 中国民間演劇の再興—浙江省を中心として— 900
磯部祐子(富山大学)
- 言語学
- 近代から現代における中国語語彙の変遷と社会的変化の関連性—北京語を基軸として— 700
藤田益子(新潟大学)
- 中国語のコーパス構築および近世中国語テキストの計量言語学的研究 500
竹越 孝(愛知県立大学)
- 東アジアの漢語方言と諸言語の世代差に反映した音韻変化の方向性 1,000
遠藤光暁(青山学院大学)
- ミャオ・ヤオ諸語の歴史文法研究—特異現象の発生と伝播を中心として— 700
田口善久(千葉大学)
- 郝敬の音韻研究について—『毛詩原解』の音注の分析を中心とした研究— 900
富平美波(山口大学)
- 中国語口語との関わりを中心とした中世の仮名法語と禅宗抄物の文体史的研究 500
李 長波(京都大学)
- 中級・上級に移行しやすい中国語初級教材の開発 700
許山秀樹(静岡大学)

- e-Learning に対応した中国語学習教材開発と自学自習促進 700
林 道生(静岡大学)

史学

- 秦簡・楚簡よりみた中国古代の地域文化の研究 600
工藤元男(早稲田大学)

- 北朝楽制史の研究—「魏書」楽志を中心に— 900
渡辺信一郎(京都府立大学)

- 明清時代の広東珠江デルタにおける儒教化の潮流と宗族 900
井上 徹(大阪市立大学)

- 明代出版史の定量的分析を可能にするための日本現存明版書誌研究 800
井上 進(名古屋大学)

教育学

- 近代日本における中国語教育の成立・展開とその教員養成システムに関する研究 500
船寄敏雄(神戸大学)

表象芸術

- 日中映画における身体表象に関する比較研究 1,400
応 雄(北海道大学)

- 日中の表象芸術に表れる死生観の比較文化的研究 1,000
有澤晶子(東洋大学)

若手研究 新規

哲学

- 日中両国における「義・利」「公・私」思想の比較研究 1,070
于 臣(鳥根県立大学)

文学

- 六朝における生命の文学 1,390
稀代麻也子(筑波大学)

- 二十世紀中国演劇における伝統劇の新作について 1,380
田村容子(早稲田大学)

- 五四新文化運動後の中国文学における「自己表現」性の研究 860
大東和重(近畿大学)

言語学

- 日・中の生活世界における対面相互行為：言語・ジェスチャー・文化を見る 1,370
武黒麻紀子(早稲田大学)

奨励研究

外国語・外国文学

- 『滄浪詩話』における「興趣」と「興」の研究 660

須山哲治(早稲田大学)

研究成果公開促進費

学術定期刊行物

- ACTA ASIATICA: Bulletin of the Institute of Eastern Culture 2,500
財団法人東方学会

学術図書

- 易学哲学史(全四巻) 1,200
伊東倫厚(北海道大学 日本周易学会)

- 「即今自立」の哲学 1,100
小路口聡(東洋大学)

- 王守仁著作の文献学的研究 1,500
永富青地(早稲田大学)

- 清朝考証学の群像 2,500
吉田 純(名古屋大学)

- 道教の齋法儀礼の思想史的研究 1,800
小林正美(早稲田大学)

- 中国中古の学術 1,200
古勝隆一(千葉大学)

- 三国志享受史論考 1,200
田中尚子(中央大学附属高等学校)

- 和漢古典学のオントロジ 1,000
相田満(国文学研究資料館)

- 詩のかたち・詩のこころ—中世日本漢文学研究— 1,400
堀川貴司(鶴見大学)

- 東瀛詩選 本文と総索引 13,300
高島 要(石川工業高校専門学校)

- 唐代文学の視点 1,200
松本 肇(筑波大学)

- 『中国地方戯曲研究』 4,100
田中一成(財団法人東洋文庫)

- ナシ(納西)族宗教経典音声言語の研究 1,000
黒澤直道(国学院大学)

- 中国古典詩における植物描寫の研究 1,900
市川桃子(明海大学)

- 宋詞研究 南宋篇 1,800
村上哲見(東北大学)

- 白居易研究 閑適の詩想 1,400
埋田重夫(静岡大学)

- 『西遊記』資料の研究 1,200
磯部 彰(東北大学)

- 崑曲中州韻教材 附 DVD 1,300
石井 望(長崎総合科学大学)

- 中日二言語のバイリンガリズム 1,300
李 美静(お茶の水女子大学)

- 言語接触と中国朝鮮語の成立 1,600
宮下尚子(久留米大学)

- 宋代の道教と民間信仰 1,700
松本浩一(筑波大学)

- 漢簡算数書—中国最古の数学書— 300
大川俊隆(大阪産業大学)

データベース

- 禅籍・仏書画像データベース 7,700
林 達也(PDRMZB)

- 新撰字鏡データベース(古字書 DB 1) 5,600
坂本信幸(KOJI_DB 1)

- 日本現存朝鮮古書データベース 4,000
藤本幸夫(DOKB)

- 新・全国漢籍データベース 11,900
井波陵一(KANSEKI)

- 東洋学多言語資料のマルチメディア電子図書館情報システム 11,600
斯波義信(ISMDLMS)

- 東洋文化研究所所蔵漢籍目録データベース 11,500

大木 康(CCC)

- 「東洋文庫所蔵」図像史料マルチメディアデータベース(ShoruihonzoDB) 14,700

- 小野欽司(MULTIDB-TBHP)

- 中国本草古典「証類本草」データベース 4,500
小松かつ子(証類本草データベース作成委員会)

- 古典籍総合データベース 51,800
白井克彦(KOTENSEKI)

- 漢字字体変遷研究のための拓本文字データベース 8,300
安岡孝一(djvuchar)

学会展望へのご協力をお願い

『日本中国学会報』には毎冊、文献目録が載せられています。これは担当校の尽力によって可能な限り広く収集しているものですが、出版物が増加する一方の昨今、捜求はいよいよ困難になっています。執筆された御本人からのお知らせをお願いするゆえんです。

次号第59集（2007年10月刊行予定）には、2006年度（平成18年）の文献目録を掲載します。2006年1月～12月に刊行された著書・雑誌論文等をお知らせ願います。

なお郵便による御報告は廃止しておりますので、E-mailでのみお知らせください。

論文も書物も一篇、一冊ごとに、部門・分野をご記入のうえ、以下にお送りください。

〔哲学部門〕 市来津由彦

tichiki@hiroshima-u.ac.jp

〔文学部門〕 佐竹 保子

satakey@sal.tohoku.ac.jp

〔語学部門〕 佐藤 昭

a-satou@kitakyu-u.ac.jp

各部門の分類は以下のとおりです。

○哲学部門

- 一、総記
- 二、先秦
- 三、秦・漢
- 四、魏・晋・南北朝
- 五、隋・唐・五代
- 六、宋・元
- 七、明・清
- 八、近・現代
- 九、朝鮮
- 十、日本
- 十一、書誌
- 十二、その他

○文学部門

- 一、総記
- 二、先秦
- 三、漢・魏・晋・南北朝
- 四、隋・唐・五代
- 五、宋
- 六、金・元・明
- 七、清
- 八、近・現代
- 九、民間文学・習俗
- 十、日本漢文学
- 十一、比較文学
- 十二、書誌

○語学部門

- 一、総記
 - 二、文字
 - 三、音韻
 - 四、語彙
 - 五、語法
 - 六、方言
 - 七、教育・学習
- (教科書は含みません)

○国内発行の刊行物に限ります

(発表言語の種類は問いません)

日本中国学会 平成17年(2005年)度 収支決算書

(単位：円)

科目	予算	決算	概要
1. 前年度繰越	¥8,300,971	¥8,300,971	—
2. 会員会費	¥12,000,000	¥12,282,967	¥282,967
3. 寄付金	¥1,000,000	¥1,127,725	¥127,725
4. 預金利息	¥1,000	¥182	¥-818
5. 著作権料分配金	¥0	¥24,500	¥24,500
合計	¥21,301,971	¥21,736,345 (A)	¥434,374

科目	予算	決算	概要
1. 事務局総務費	3,230,000	2,466,127	(1)~(7) ¥763,873
(1)印刷費	1,400,000	1,109,650	¥290,350
(2)通信費	1,000,000	728,145	¥271,855
(3)交通費	70,000	121,060	¥-51,060
(4)消耗品費	200,000	91,880	¥108,120
(5)庶務処理費	100,000	0	¥100,000
(6)雑費	250,000	205,392	うち振込手数料¥109,616 ¥44,608
(7)業務委託料	210,000	210,000	斯文会 ¥0
2. 事務局人件費	1,860,000	1,470,000	(1)(2) ¥390,000
(1)幹事手当	360,000	360,000	¥0
(2)謝金	1,500,000	1,110,000	¥390,000
3. 事務局会議費	400,000	271,324	(1)(2) ¥128,676
(1)会議費	100,000	80,364	¥19,636
(2)役員旅費	300,000	190,960	¥109,040
4. 事業費	6,850,000	5,992,790	(1)(2)(3) ¥857,210
(1)学会報等刊行費	5,500,000	4,754,790	¥745,210
イ. 印刷費	3,000,000	2,455,225	学会報及び名簿 ¥544,775
ロ. 編集費	1,600,000	1,600,000	¥0
ハ. 翻訳謝金	300,000	240,500	¥59,500
ニ. 発送費	600,000	459,065	モリモト印刷業務委託 ¥140,935
(2)学術大会運営費	1,200,000	1,200,000	¥0
(3)マルチメディア専費	150,000	38,000	¥112,000

学会基金

基本金	4,300,000	基本金	4,300,000	備考(基本金内訳)	
前年度繰越金	523,983	日本中国学会賞	160,000	奥野基金	500,000
預金利息	572	次年度繰越金	364,909	佐藤基金	200,000
信託収益金	354	合計	524,909	池田基金	300,000
合計	524,909			伊藤基金	300,000
				積立基金	3,000,000

科目	予算	決算	概要
5. 各種委員会運営費	¥1,625,000	¥1,383,580	¥241,420
(1)大会委員会	¥15,000	¥15,000	¥0
イ. 通信費	¥5,000	¥5,000	¥0
ロ. 会議・旅費	¥0	¥0	¥0
ハ. 謝金	¥5,000	¥0	¥5,000
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥10,000	¥-5,000
(2)論文審査委員会	¥610,000	¥479,667	¥130,333
イ. 通信費	¥140,000	¥104,030	¥35,970
ロ. 会議・旅費	¥400,000	¥319,651	¥80,349
ハ. 謝金	¥40,000	¥40,000	¥0
ニ. 消耗品・雑費	¥30,000	¥15,986	¥14,014
(3)出版委員会	¥330,000	¥308,700	¥21,300
イ. 通信費	¥30,000	¥14,090	¥15,910
ロ. 会議・旅費	¥180,000	¥182,460	¥-2,460
ハ. 謝金	¥30,000	¥30,000	¥0
ニ. 会報編集費	¥80,000	¥80,000	¥0
ホ. 消耗品・雑費	¥10,000	¥2,150	¥7,850
(4)選挙管理委員会	¥100,000	¥107,784	¥-7,784
イ. 通信費	¥10,000	¥6,530	¥3,470
ロ. 会議・旅費	¥50,000	¥51,812	¥-1,812
ハ. 謝金	¥20,000	¥45,000	¥-25,000
ニ. 消耗品・雑費	¥20,000	¥4,442	¥15,558
(5)研究推進・国際交流委員会	¥130,000	¥20,384	¥109,616
イ. 通信費	¥5,000	¥80	¥4,920
ロ. 会議・旅費	¥100,000	¥0	¥100,000
ハ. 謝金	¥20,000	¥20,000	¥0
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥304	¥4,696
(6)将来計画特別委員会	¥440,000	¥452,045	¥-12,045
イ. 通信費	¥5,000	¥660	¥4,340
ロ. 会議・旅費	¥400,000	¥431,385	¥-31,385
ハ. 謝金	¥30,000	¥20,000	¥10,000
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥0	¥5,000
1~5 予備費	¥13,965,000	¥11,583,821	¥2,381,179
合計	¥21,301,971	¥21,583,821 (B)	¥9,718,150
次年度繰越金		¥10,152,524 (A)	(A)収入差額+(B)支出差額
総計	¥21,301,971	¥21,736,345	

上記の通り、相違ないことを認めます。

平成18年5月16日

日本中国学会監事

安藤 信廣
戸倉 英美
松本 肇

日本中国学会 平成18年(2006年)度収支予算案

(単位：円)

	科 目	予 算 案
収 入 の 部	1. 前年度繰越	¥10,152,524
	2. 会員会費	¥12,000,000
	3. 寄付金	¥1,000,000
	4. 預金利息	¥1,000
	5. 著作権料分配金	¥0
	合 計	¥23,153,524

	科 目	予 算 案
支 出 の 部	1. 事務局総務費	(1)~(7) ¥3,280,000
	(1)印刷費	「便り」封筒・投票用紙印刷を含む ¥1,400,000
	(2)通信費	「便り」投票用紙発送を含む ¥1,000,000
	(3)交通費	¥70,000
	(4)消耗品費	¥200,000
	(5)庶務処理費	¥100,000
	(6)雑費	振込手数料および対外費を含む ¥300,000
	(7)業務委託料	¥210,000
	2. 事務局人件費	(1)(2) ¥1,860,000
	(1)幹事手当	¥360,000
	(2)謝金	事務局専従謝金を含む ¥1,500,000
	3. 事務局会議費	(1)(2) ¥700,000
	(1)会議費	¥100,000
	(2)役員旅費	¥600,000
	4. 事業費	(1)(2)(3)(4) ¥8,000,000
	(1)学会報等刊行費	イ~ニ ¥5,500,000
	イ. 印刷費	学会報及び名簿 ¥3,000,000
	ロ. 編集費	¥1,600,000
	ハ. 翻訳謝金	英文要旨作成 ¥300,000
	ニ. 発送費	¥600,000
(2)学術大会運営費	¥1,200,000	
(3)マルチメディア事業費	ホームページ運営費を含む ¥500,000	
(4)日本中国学会賞積立金	¥800,000	

	科 目	予 算 案
支 出 の 部	5. 各種委員会運営費	¥1,475,000
	(1)大会委員会	¥15,000
	イ. 通信費	¥5,000
	ロ. 会議・旅費	¥0
	ハ. 謝金	¥5,000
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000
	(2)論文審査委員会	¥610,000
	イ. 通信費	¥140,000
	ロ. 会議・旅費	¥400,000
	ハ. 謝金	¥40,000
	ニ. 消耗品・雑費	¥30,000
	(3)出版委員会	¥330,000
	イ. 通信費	¥30,000
	ロ. 会議・旅費	¥180,000
	ハ. 謝金	¥30,000
	ニ. 会報編集費	¥80,000
	ホ. 消耗品・雑費	¥10,000
	(4)選挙管理委員会	¥150,000
	イ. 通信費	¥10,000
	ロ. 会議・旅費	¥80,000
	ハ. 謝金	¥40,000
	ニ. 消耗品・雑費	¥20,000
	(5)研究推進・国際交流委員会	¥130,000
	イ. 通信費	¥5,000
	ロ. 会議・旅費	¥100,000
	ハ. 謝金	¥20,000
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
(6)将来計画特別委員会	¥240,000	
イ. 通信費	¥5,000	
ロ. 会議・旅費	¥200,000	
ハ. 謝金	¥30,000	
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
1~5 予備費	¥15,315,000 ¥7,038,524	
	合 計	¥23,153,524

学会基金

	基本金		基本金		備考(基本金内訳)	
収 入 の 部	前年度繰越金	4,300,000	日本中国学会賞	4,300,000	奥野基金	500,000
	日本中国学会賞積立金	363,983	次年度繰越金	160,000	佐藤基金	200,000
	預金利息	800,000		1,005,483	池田基金	300,000
	信託収益金	500			伊藤基金	300,000
	合 計	1,000			積立基金	3,000,000
	合 計	1,165,483	合 計	1,165,483		

学会ホームページの一層の充実をめざして

学会ホームページが設けられてから、今日まですでに数年が経ちました。この間、ホームページにアクセスして学会の諸情報を入手された経験のある会員も少なくないことと思います。このたび、学会と会員との双方向の意思疎通をさらにスムーズにするために、学会ホームページの一層の充実をめざして、新たにホームページ特別委員会（正式発足は平成19年4月）を設置することになりました。

委員会を設置するためには「委員会規約」の改正が必要ですが、去る平成18年10月の理事会・評議員会において、将来計画委員会委員長池田より提案が行われ、審議の結果、原案を一部修正して以下のように決まりました。

「委員会規約」（該当部分のみ抜粋、下線部が改正箇所）

1 ……当分の間、将来計画特別委員会・ホームページ特別委員会を置く。

3 委員会の任務

(7) ホームページ特別委員会

a ホームページ（日本語版・英語版・中国語版）の作成と更新。

b 学会諸事業の予告と案内、各種委員会の議事報告、電子メールによる照会・問い合わせの窓口対応、中国学関連のホームページへのリンク、などを行う。

c データベースの作成・管理・公開（学会報や学会発表要旨を含む）など。

d その他

ホームページ特別委員会の委員長には、正式発足する平成19年4月より2年間、担当理事の渡邊義浩氏が就任されます。

学会ホームページや、その他、学会のあり方についてご意見がありましたら、ふるってホームページ特別委員会にお寄せください。

2006年10月10日

将来計画委員会委員長 池田 知久

「日本中國學會報」論文執筆要領

日本中國學會

応募資格

1. 日本中国学会会員に限る。

使用言語等

2. 応募原稿（以下「原稿」と略称）は和文によるものとし、未公開のものに限る。
ただし、口頭で発表しこれを初めて論文にまとめたものは未公開と見なす。

原稿枚数等

3. 原稿は校正時に加筆を要しない完全原稿とする。
4. 原稿枚数は、本文・注・図版等をあわせて、400字詰原稿用紙55枚以内（厳守）とする。注も原稿用紙1マスに1字を納める。ワープロ使用の場合は、用紙サイズはA4、1行30字毎ページ40行、文字は10.5ポイントを用い、400字詰原稿用紙に換算した全体の枚数を第1ページの見易い場所に明記すること。
5. 図版を必要とする場合、占有面積半ページ分を400字詰原稿用紙2枚の割合で換算する。図版原稿は原則としてそのまま版下として使用できる鮮明なものとし、掲載希望の縦・横の寸法を明示する。

体裁・表記等

6. 原稿は縦書きを原則とする。特に必要とするものについては、論文審査委員会の議を経て、横書きを認めることがある。
7. 引用文は内容に応じて原文、訳文、書き下し文のいずれかを用いるものとする。原文の場合は該当する訳文または書き下し文を、訳文または書き下し文の場合は該当する原文を本文中または注に明示すること。
ただし、一読して疑問の生ずる余地がないものについては、省略することを認める。中国語以外の外国語の引用もこれに準ずる。
校勘・版本研究等内容上適切と認められるものについては、原文のみ引用することを妨げない。
原文に返り点・送り仮名をつけることは原則として認めない。日本漢学・日本漢文等に関する内容のもので、訓点の施し方自体を論ずる場合はこの限りではないが、加算された印刷費は執筆者の負担とすることがある。
8. 原稿は正漢字体・常用漢字体のいずれの使用も可とするが、印刷にあたっては全文を正漢字体（旧字）に統一する。
活字は本文9ポイント、括弧内は8ポイントを、注はすべて8ポイントを使用する。
特に本文括弧内を9ポイントにする場合および内容上特に異体字であることが必要な場合は、当該箇所を明記すること。

9. 注は、各章・節ごとにつけず、通し番号を施して全文の末尾にまとめる。割注は用いないこと。
10. 中国語のローマ字表記は、執筆者の選択にゆだねるが、同一論文中にあつては、ウェード式・漢語拼音方案等何らかの統一があることが望ましい。ただし、特殊な綴りで通用している固有名詞（例 孫逸仙 Sun Yat-sen）、本人が自分の名前に使用している綴りについてはその使用も認める。
日本語のローマ字表記は、ヘボン式の使用を原則とする。

論文要旨

11. 応募時の原稿には400字5枚以内の論文要旨を添付する。
12. 学会報掲載の論文要旨は、英文とする。論文掲載者は、完成原稿提出時に、400字3枚（1200字）程度の日本語要旨を添付すること。

原稿提出

13. 原稿などは必ず書留により下記に郵送するものとし、毎年1月20日までの消印のあるものを有効とする。持参は認めない。
〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25 斯文会館内 日本中國學會
14. 応募の際、審査を希望する部門（哲学・思想または文学・語学）の別を原稿第1ページに朱書すること。ただし、論文の内容により、両部門にわたる審査を希望することができる。
15. 応募時には、本文・要旨とも複写コピーを用意し、計4部を提出する。（事故に備え、提出前にあらかじめ自家用のコピーをも作成しておくことが望ましい。）又、原稿は原則として返却しない。

校正

16. 執筆者校正は再校までとする。校正時の加筆・訂正は初校段階に限り、必要最小限のものについてのみ認める。加筆・訂正の結果加算された印刷費は、執筆者の負担とすることがある。

抜刷

17. 掲載論文の執筆者に対しては、抜刷30部を贈呈する。抜刷の追加を希望する場合は、初校返送時に追加所要部数を連絡のこと。その分については、実費及び増加送料を本人負担とする。

(昭和62年10月11日制定)

(平成13年5月13日修正)

(平成14年10月13日一部修正)

(平成15年10月5日一部修正)